

二野 東段遺跡・横穴墓

国道248号線工事に伴う
埋蔵文化財の発掘調査報告書

1999

岐阜県 可児市教育委員会

はじめに

古墳時代における畿内勢力の東国支配のための出発点、美濃地方は歴史上のいくつかの局面において、その地の利が故に注目されてきました。

そしてその歴史に埋没してしまった数多くの出来事は、発掘調査によって得られた資料から、断片的ながらも想像され、或いは推定されてきています。

本調査においては、低丘陵上に営まれた、主に集落に関する資料を得ることができましたが、縄文、弥生、古墳、奈良、平安、鎌倉、室町の各時代に亘る遺構や遺物の出土は、正に埋もれてしまった民衆のくらしの一局面を垣間見るようです。

とかく注目されがちな地方豪族に関する発見と同等に、その陰で連綿と営まれていた人びとのくらしや、日常的な出来事もまた、美濃という地の利の中で評価されていかなければならないと思います。

末筆ながら、本調査に当たりましては、地権者の方々や工事関係者の皆様方には、ご理解とご支援を賜りました。心より厚く御礼を申し上げ、ここに調査の成果をご報告申し上げます。

平成11年3月

可児市教育委員会

教育長 渡辺 春光

例 言

1. 本報告書は、岐阜県^{カニシニノノヒガシ}可児市二野字東段2009番地外12筆に所在した二野東段遺跡の緊急発掘調査の報告書であり、同二野字東段2045番地の3に所在した二野東段横穴墓の報告も含む。
2. 発掘調査は、国道248号線バイパス建設事業に係るもので、市教委の試掘調査を経た後、事業主体である岐阜県（可茂土木事務所）から可児市が委託を受け、市教委が調査主体として実施した。試掘調査費用は国と県の補助金を受け、本調査費用は県からの委託金で賄った。
3. 発掘調査の体制は次のとおりである。

教 育 長	渡 辺 春 光	作業員の皆さん（敬称略）		
教 育 部 長	宮 島 凱 良	伊 佐 治 誠	岩 名 孝 代	可 児 英 治
社 教 課 長	奥 村 晴 保	可 児 定 夫	川 島 富 貴 子	北 西 幸 彦
同 補 佐（文化係長）	亀 谷 泰 隆	香 田 公 夫	成 尾 孝 子	水 野 テ ッ 子
調 査 担 当	吉 田 正 人	水 野 良 雄	渡 辺 弘	
同	近 藤 浩 一 郎	及び京都大学学生諸氏のご協力を得ました。		

4. 本書の編集は長瀬治義が担当した。執筆は、第1章を吉田正人が、その他を長瀬が受け持った。遺物の実測は水野テツ子と成尾孝子、長瀬が行い、トレースは水野、近藤浩一郎、長瀬が、写真は吉田が担当した。
5. 発掘調査に係る図面類と遺物は、可児市教育委員会（可児郷土歴史館）が保管する。
6. 方位は真北である。

目 次

I. 発掘調査の経過	1
II. 遺跡の立地と環境	2
III. 発見された遺構と遺物	7
(1) 竪穴住居址	7
(2) 掘立柱建物址	14
(3) 土塚址	20
(4) その他の遺構と遺物	24
IV. 二野東段横穴墓	37
V. まとめ	39
○ 写真図版	41

I. 発掘調査の経過

(1) 調査に至る経緯

平成9年1月、(株)甲山製作所から工場移転に伴う新工場建設のための、事前協議書が可児市に提出された。これに伴い開発認可の窓口課である企画調整課から、平成9年2月24日付けで市教委社会教育課に対し、事業に対する意見の照会があった。新工場建設予定地のある可児市二野字東段地内は、以前から石器片や土器片が採集されることを、市教委でも確認していた。3月4日に現地踏査をしたところ、建設予定地内で多数の山茶碗片の他、石のチップや須恵器片などを採集した。このため、社会教育課からは、平成9年3月5日付けで「遺跡の可能性があり、取り扱いについて協議すること」と回答した。

一方、この地域は、遺跡として岐阜県遺跡地図には掲載されていなかったため、社会教育課ではこの状況を県教委文化課に説明し、対処方法の指導を得るべく職員の派遣を依頼した。3月15日に文化課職員と共に再度建設予定地を踏査した。この結果、試掘調査をすべきとの指示があり、社会教育課では改めてこの内容の意見を提出した。

この後、(株)甲山製作所と協議を行ったが、建設予定地を変更することは無理であるとの結論に至った。このため、事前に試掘調査を行った後、遺跡と判明した場合には本発掘調査を実施することとなった。

尚、この工場移転は国道248号線バイパス建設に伴うものであり、可茂土木事務所とも同様の協議を行っている。

(2) 調査の経過

5月2日から10日まで5本の試掘トレンチ設定、樹木等伐採、重機による表土剥ぎを実施し、9日から作業員による掘り下げに入った。表土から地山面までは約30cmと浅く、10日には第2トレンチ及び第5トレンチの交差する地点に、12日には第1トレンチ内で竪穴式住居址の一部を検出した。以後、各トレンチから竪穴式住居址、土塚址、(柱)穴の検出をみたため、市教委は遺跡と認識したが、この状況が事業者側に遺跡であると説明するため、第2・5トレンチの交差点付近の住居址を完掘できるよう調査区を拡張し、他のトレンチについては遺構がかかる部分を完掘することとした。この作業が6月18日まで続き、6月19日からは、遺構の検出が顕著な第1・2・5トレンチ付近を中心に、調査区を拡張するための樹木等伐採、重機による表土剥ぎを実施し、本調査に入った。

本調査に入ってから、竪穴式住居址や土塚址はもとより、山茶碗の入った掘建柱建物の柱穴とみられるピットや井戸等が検出され、縄文時代から中世にかけての集落跡であることが判明した。7月に入り、雨の日が続き作業が予定通り進まなかったが、精査の終了した遺構から写真撮影、実測作業を行ない、8月1日現場調査を終了した。この後、整理作業に入った。

尚、文化財保護法に基づく手続きは次の通りである。

- ・第57条の5第1項 平成9年7月16日付 可教社第193号 (発見届)
- ・第98条の2第1項 平成9年7月17日付 可教社第196号 (発掘調査の報告)
- 平成9年8月12日付 可教社第235号 (発掘調査終了の報告)
- ・第65条、遺失物法第1条第1項 平成9年8月8日付 可教社第234号 (埋蔵文化財保管証)
- 平成9年8月8日付 可教社第233号 (埋蔵物発見届)

II. 遺跡の立地と環境

(1) 自然的・歴史的環境

可児市は岐阜県の南部に位置し、その北辺を大河木曾川が蛇行する。当地は、基盤の美濃堆中古生層が陥没してできた可児・美濃加茂盆地の南部に当り、市域の各所で特徴ある地層の堆積状況を呈している。東・西辺部はチャートを主体とする中古生層が露頭し、標高300mを超える丘陵の最高所を形成している。南部一帯は、第三紀鮮新世の古木曾川の氾濫による堆積物である土岐砂礫層が覆う。この地層には団塊的に白色粘土が含まれ、平安期以降の美濃窯の大発展を促す必要条件となり、その窯稼動の舞台となる。標高110~180m付近に露頭する第三紀中新世の平牧層は、基盤陥没後にできた可児湖の堆積物で主に凝灰質砂岩から成り、土岐砂礫層の下位にあるが、中村層（帷子累層）とも合わせて、古墳時代後期全般に可児川の支流、久々利川水系で100基を超える横穴墓造営の舞台となった⁽¹⁾。尚、木曾川流域に分布する家形石棺の一部は、この地層が石材として切り出され、横穴墓造営集団や川原石積石室墳造営集団と密接に関係を保ちつつ供給されている。市北部一帯の平坦地は、主に第四紀に属する木曾川の段丘堆積物から成り、木曾川に沿って低・中・高位の三段が認められる。

古墳時代前半期の集落は、川合宮之脇遺跡（低位）や徳野遺跡（中位）、欠ノ上遺跡（中位）等、各所で見受けられるが、古墳の造営は、中位段丘面の前波古墳群（西寺山、野中、長塚等）と平牧層の丘陵上の身隠山古墳群（白山、御嶽の両古墳）に限られる。

古墳時代後半期の集落は市内全域に散見され、群集墳の形成もこれに連動したあり方を示しているものと考えられる。低位段丘面では土田渡古墳群、川合古墳群が著名で、先の川原石積石室墳造営集団の本拠地でもある。

奈良時代の集落は川合宮之脇遺跡などでみつかっており、古墳時代後半期の集落から継続性をもつようである。また、掘立柱建物を有する中世の集落も同遺跡などで確認されており、地元産の山茶碗類がよく供給されている。

(2) 二野東段遺跡・横穴墓の立地条件

本遺跡は、可児盆地の南縁を東西へ流れる正に久々利川水系にあり、眼下に久々利川を見下ろす、標高130~135m付近の低丘陵平坦部に立地する。久々利川沖積地との比高差は約20~25mを測り、平牧層の上に堆積した赤土（土岐砂礫層類似）が地山である。この付近は平牧層と土岐砂礫層の露頭の境界に近く、谷間や崖面では前者の露頭をみる。

土岐砂礫層は、前述のように平安期以降の美濃窯発展の舞台であり、当地以南の丘陵には白瓷や山茶碗類を焼成した古窯址が数多くみられる。無論、本遺跡へも多数供給されていた。また、土岐砂礫層にはチャートの円礫が多数含まれ、徳野遺跡にみる石器石材の分析にも表われたように、この石材の活用が顕著であり、本遺跡の縄文期においては更に著しい。⁽³⁾

当水系が家形石棺の供給を支える横穴墓造営集団の本拠地であることは前述したが、谷合の斜面に露頭する平牧層に対して穿たれた横穴墓群は、大字単位で5群、まとまりを気にしつつ7群程度に分けられる。本遺跡は正にその真っただ中にあり、古墳時代後期における二野鍋煎横穴墓群との関係で、その集団の一部を垣間みるのに絶好ではある。但し、付近にマウンドを有する古墳も点在しており、

羽崎古墳群と同様の様相を呈している⁽⁴⁾。

尚、本遺跡から東へ約500mの丘陵上では、享保年間に近畿式の突線鈕袈裟襷文銅鐸が出土しており、当水系で弥生時代の他の遺跡が知られていなかっただけに、関連する一資料を提供した。

本遺跡は、その推定範囲が更に南へ、北へ、西へと広がるようであり、付近住民からの聞き取り調査と現地踏査を合わせて、図2を作成した。これによれば、当東段遺跡と西に谷を挟んで（仮）西段遺跡が立地し、またかつては谷合の横穴墓群とは別に、丘陵にも円墳等が群を形成していたようである。経営基盤は、眼下久々利川の沖積地にあると考えられるが、農業と石工の職掌が高塚古墳と横穴墓に反映されるのかどうか。羽崎古墳群同様、興味深いテーマを与えている。

二野東段横穴墓は、二野鍋煎横穴墓群のB支群と同じ谷の入口部分、東斜面に選地する。14基のB支群とは、現在のところひとつ離れて立地する状況であり、標高115m付近で東へ開口する。本水系における100基を超す横穴墓は、谷の斜面に作られたものは、右岸（久々利・羽崎地区）では谷に入って左側の斜面に、左岸（柿下・二野・大森地区）では谷に入って右側の斜面に、ほぼ決まって造られている。また、谷の最奥や谷ではない斜面に造られたものは、南面するものが多い。即ち、開口方向は、東、南東、南方向が一般的となる⁽⁵⁾。本例もこの規則性に合致している。

註

- (1) 長瀬『久々利西山横穴墓』
1994 可児市教育委員会
- (2) 長瀬「濃尾地方の川原石積石室」
『川合遺跡群』1994 可児市教育委員会
- (3) 長瀬『徳野遺跡A地点』1998
可児市教育委員会
- (4) 亀谷・長瀬『羽崎古墳群』1985
可児市教育委員会
- (5) 註(1)に同じ

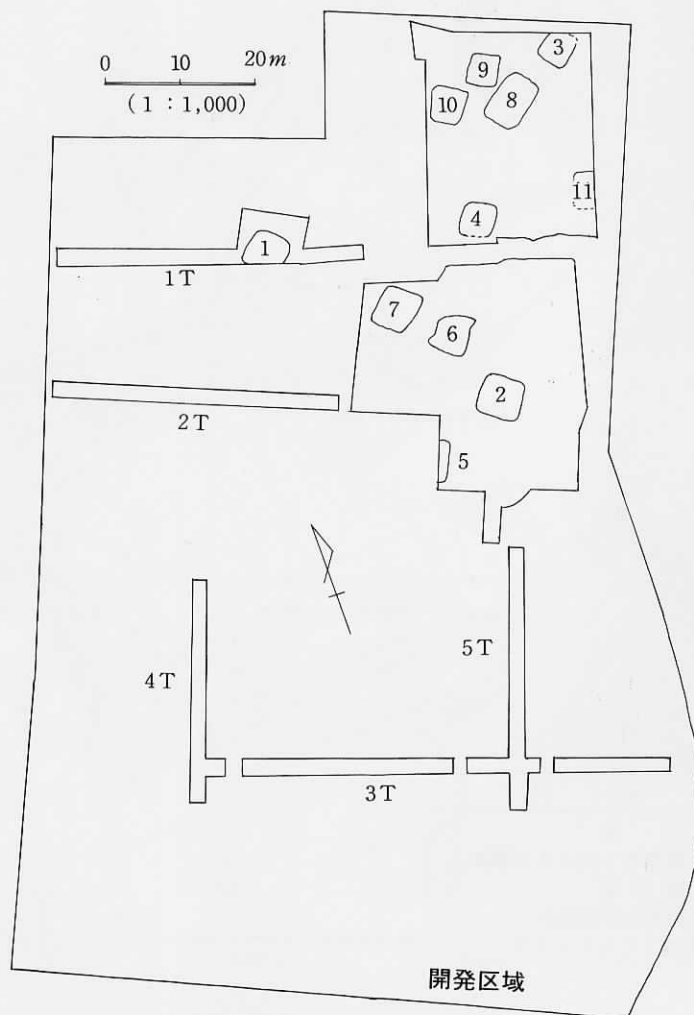


図1 調査区域図



図2 遺跡の立地と環境

图3 全体遺構図



図3 全体遺構図



Ⅲ. 発見された遺構と遺物

(1) 竪穴住居址

竪穴住居址は11軒検出された。所属時期の内訳は、縄文時代2軒、弥生時代2軒、古墳時代後期～奈良時代7軒である。以下、住居址ごとに概略を記すが、表3の出土遺物集計表も参照されたい。以下、「竪穴住居址」を「SB」と略す。

SB1 (図4)

第1レンヂ内(1T)に試掘調査でかかり、B5、C5グリッドを拡張してその大概ねをつかんだ。平面形はやや長方形を呈し、床面の寸法は約4.9m×4.5mを測る。西壁と南壁に沿っては幅15～25cm程度で、深さ5～10cm程度の溝が廻る。支柱は2本を検出したが、深さ10～15cmあり、おそらく支柱4本となるであろう。柱間は2.3mを測る。床は平坦である。

床面はほぼ全面に貼床が確認され、硬く踏みしめられていた。北辺の中央やや東寄りにはカマドを有するとともに、これに近い北角には貯蔵ピットを備えている。床面からの深さは13cm程である。

所属時期の推定可能な遺物は、床面から土師器甕の細片が、貯蔵ピットから33の土師器甕の破片と須恵器甕の破片が出土しているに過ぎない。土師器は磨耗著しく、須恵器は胴部片であるだけに詳細はつかめないが、古墳時代後期(7世紀)でも新しい段階と考えている。

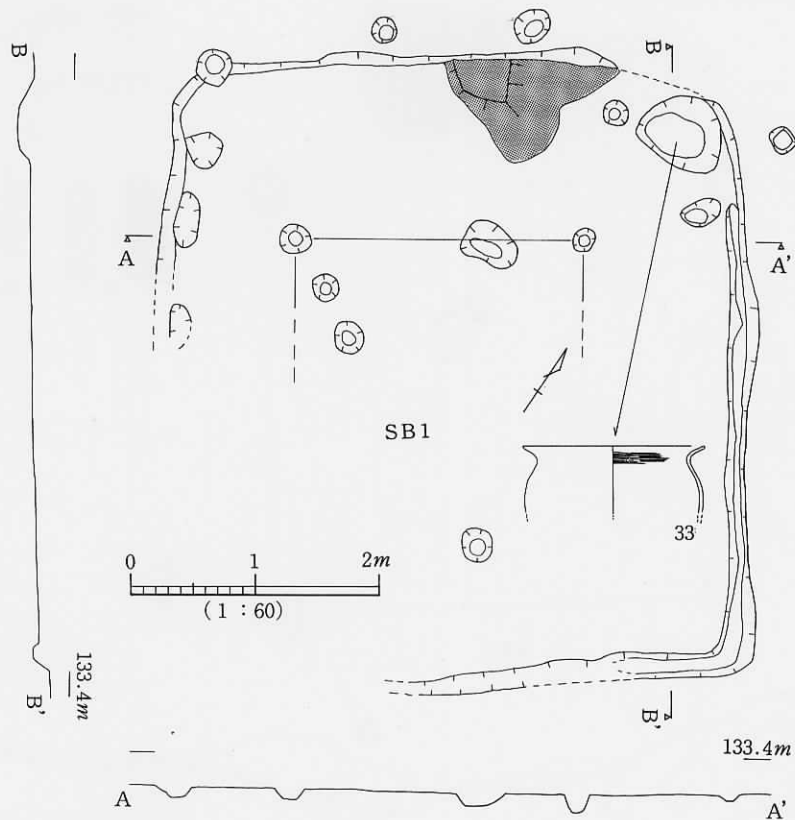


図4 SB1実測図

SB 2 (図5)

D9・E9グリッド内からやや大型のSBが検出された。平面形は長方形を呈するようで、床面の寸法は約7.0m×6.1m、残存する深さ約40cmを測る。支柱は4本あり、長辺約3.6m、短辺約3.3~3.4m、床面からの支柱穴の深さは15~33cmである。

床は貼床を施し非常に硬くしまり、黄褐色土に赤色の土が混じっている。SBのほぼ中央に深さ15cmのピットを検出するとともに、長辺の一方である北西辺の中央にカマドを、その脇に貯蔵ピットとみられる遺構を検出した。カマドは、SB1同様に支石を持たず粘土のみで造り付けられ、貯蔵ピットは73×69cmの大きさで、深さは22cmを測る。

SBの覆土は灰褐色を呈し、17の耳飾や石鏃を始め多時期に亘る遺物が出土している。所属時期推定の手がかりは、カマドから出土した土師器の破片や覆土出土の土師器と須恵器の破片で、35と36の須恵器から7世紀末を与えたい。34の坏蓋は7世紀前~中頃のもので、紛れ込みと考える。他に37と38の砥石が出土しているが、図に示したものは全て覆土中のものである。

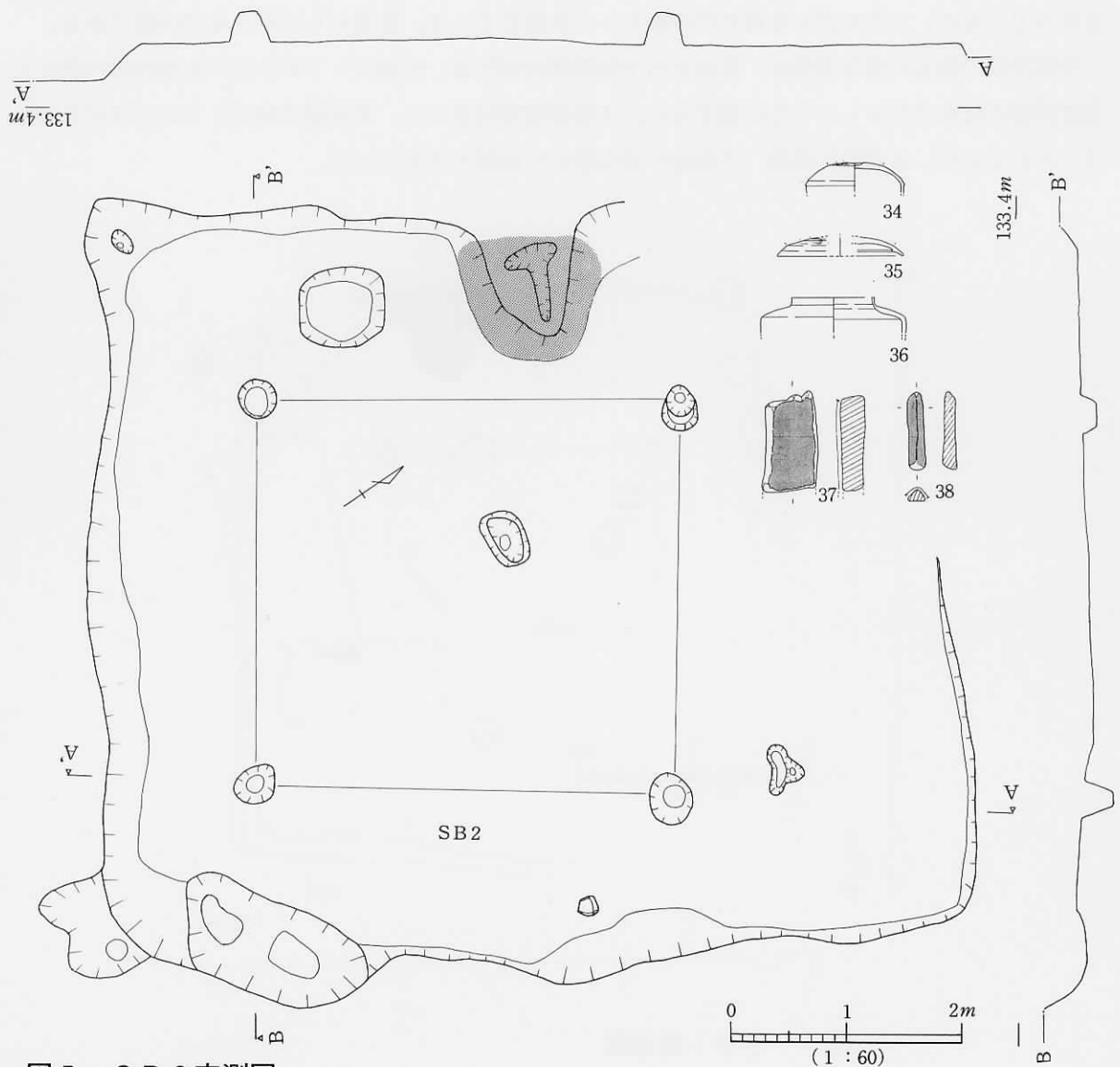


図5 SB2実測図

SB 3 (図6)

-A 9・10と-B 9・10グリッドにまたがって、方形プランと考えられるSBを検出したが、東側部分の掘り方はずかめていない。床面の寸法は南北で約4.7mを測り、検出面からの深さは32cm程度である。主柱に該当すべき位置に2ヶ所ピットを認めるが、ピット列との関わりから定かではない。

床面には炉の痕跡も検出できなかったが、掘削した地山面を叩きしめて床面としていた。SBの覆土は、黒色土の混じりがあるもので、この下部もしくは床面直上から26~29の弥生土器が出土している。26は台付甕の台部、27~29はパレス系の壺と考えられ、28と29は台付の壺となる同一個体とみている。いずれも磨耗が激しく詳細な文様はつかめないが、弥生後期山中式に属するものであろう。覆土中の遺物は、その他多時期に亘っている。

SBの南東辺では、屋外から屋内へ入る玄関口のように、舌状のスロープが検出された。元は階段であったのかも知れないが、掘り残しによる造作である。

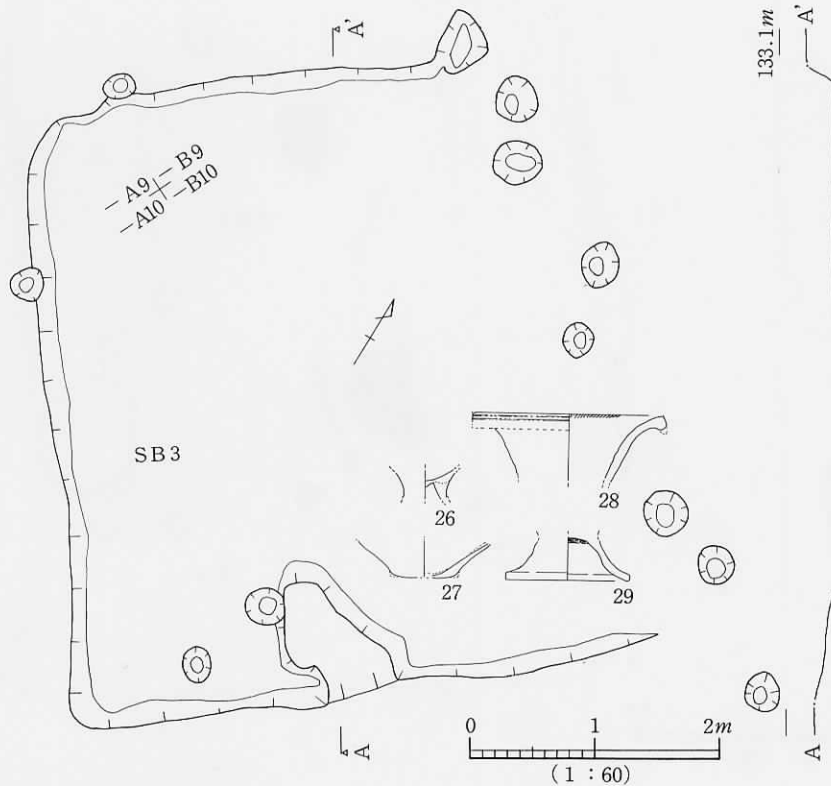


図6 SB 3 実測図

SB 4 (図7)

B 8とB 9グリッドで、隅丸方形と考えられるプランのSBを検出したが、南側部分の輪郭がはっきりしない。床面の寸法は東西で約4.5mを測るが、南北の幅は不明である。このため、主柱が4本なのか6本なのかも確定できないが、南隅にある貯蔵穴をこのSBのコーナー部分と把えるのが自然であり、A-A'断面での床面幅を約4.2mと推定する。とすれば、柱穴とみられる南側の2穴とアミ目で示すもう一つの地焼炉は、別のSBの重複を示すものとなる。

このように考えれば、支柱間の寸法は東西で2.45m、南北で1.75mとなる。SB検出面から床面までの深さは約20cm、床面から支柱穴底までの深さは北角が15cm、南角が17cm、東角が33cmと、柱根レベルに差がみられる。南角の貯蔵穴の深さは14cm程度と浅い。

床面は平坦で貼床が認められ、著しく硬い。SBの覆土は、地山よりやや暗い暗黄褐色土でよくしまり、縄文期のチップなどを主体に他の時代のものも混在していた。

本SBは、カマドを備えず地焼炉であること、遺物の主体が縄文期にあることなどを合わせて考えて、唯一図化できた土器片25に所属時期を求めている。25は磨耗著しい器面に、わずかに条痕文がみとれる甕形（もしくは深鉢形）土器の口縁部で、縄文晩期に属するものであろう。

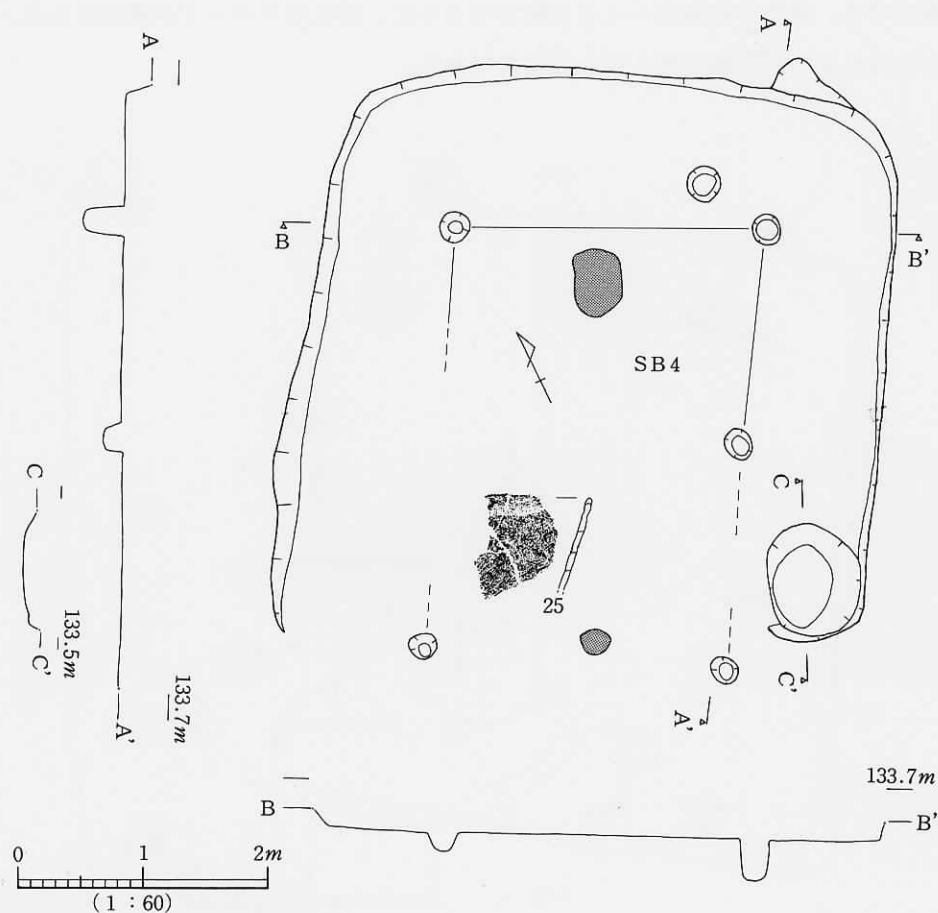


図7 SB4実測図

SB5 (図8)

F8グリッド内、調査区の南西角で、中世の溝SD7にカットされた住居址の一部を検出した。全体を把握することはできなかったが、床面における南北幅約5.45mを測る方形プランを採るものと考えられる。SB検出面から床までの深さは10~23cmで、その覆土中からは、7の石鏃やチップ、縄文土器片などが出土した。土器片は2個体以上で15片程あり、本SBの所属時期を示すものと考えられる。土器片は磨耗著しく、深鉢または甕であろう。おそらく晩期に属するものと推定する。

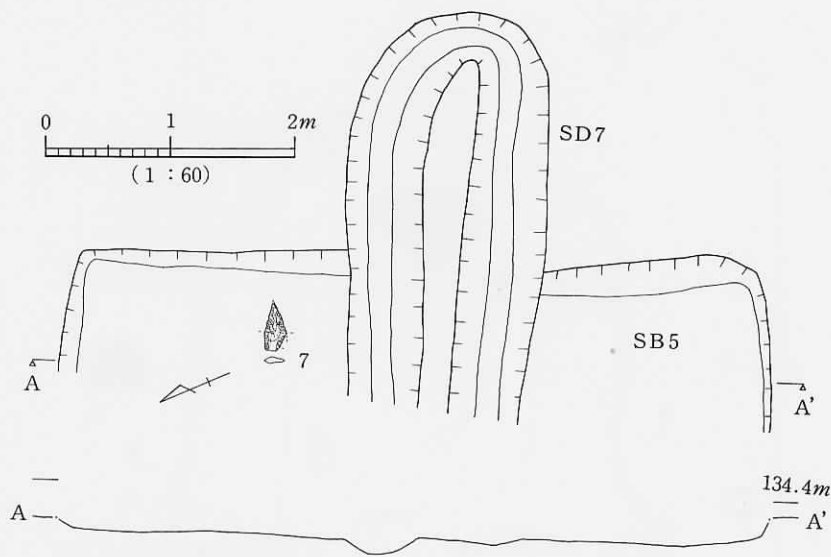


図8 SB5実測図

SB6 (図9)

D8グリッドにあって不定方形のプランを呈するSBである。床面の幅はA-A'断面で約4.1m、B-B'断面で約3.3mを測る。検出面から床までの深さは17cm程度である。主柱は4本と考えられるが、3つの柱穴のみが検出された。SBの東側辺の両隅には、ごく浅い溝で区画された部分があり、北側の部分では内側の床面レベルと同じであるのに対し、南側のそれでは床面レベルよりも数cm高くなっている。床面は平坦で、主柱間の長さは東西2.0m、南北2.25mを測る。アミで示した北側の部分は、床が熱を受け焼けており、地焼炉もしくは(位置的に)カマドの残影とみる。3つの主柱穴の深さは、北が40cm、南が17cm、東が23cmを測る。

SBの覆土は黒色を呈し時期差のある遺物を含んでいるが、地焼炉もしくはカマド部分から出土した数個体分の土師器甕の破片は、7~8世紀を示す。図示した39~42の遺物は覆土中のものであるが、当SBの所属時期に近いものと考えている。39、40は美濃須衛編年に照らせば8世紀前半、奈良時代を示し、41、42は川原石を利用した砥石である。

SB7 (図10)

C7とD7・8グリッド内において、調査区の西に位置する。SBの平面形はほぼ正方形で、SBの一辺(北西辺)を中心に幅17~30cm、深さ3~7cm程の浅い溝が巡っている。床面の幅は、北西-南東で4.1m程度、北東-南西で4.3m程度を測り、各隅には主柱穴とみられる4つの穴が配されている。床面積と屋内の空間を広くとるための主柱配置と考えられるが、このような例は市内では珍しい。主柱間の距離は、東-南間が約3.45m、西-南間が3.47m、北-西間が3.71m、北-東間が3.35mを測る。穴の床面からの深さは、北隅31cm、東隅29cm、南隅10cm、西隅8cmである。床は平坦で貼床はないが、掘削した地山面を硬く叩きしめている。検出面から床面までの深さは25cm程度を測る。

SBの北東側の壁にはカマドが造り付けられており、土師器甕が数個体分出土している。図に示した43は、川合宮之脇遺跡A地点の編年に当てはめれば後VII~VIII期に該当する長胴甕の下半部であり、

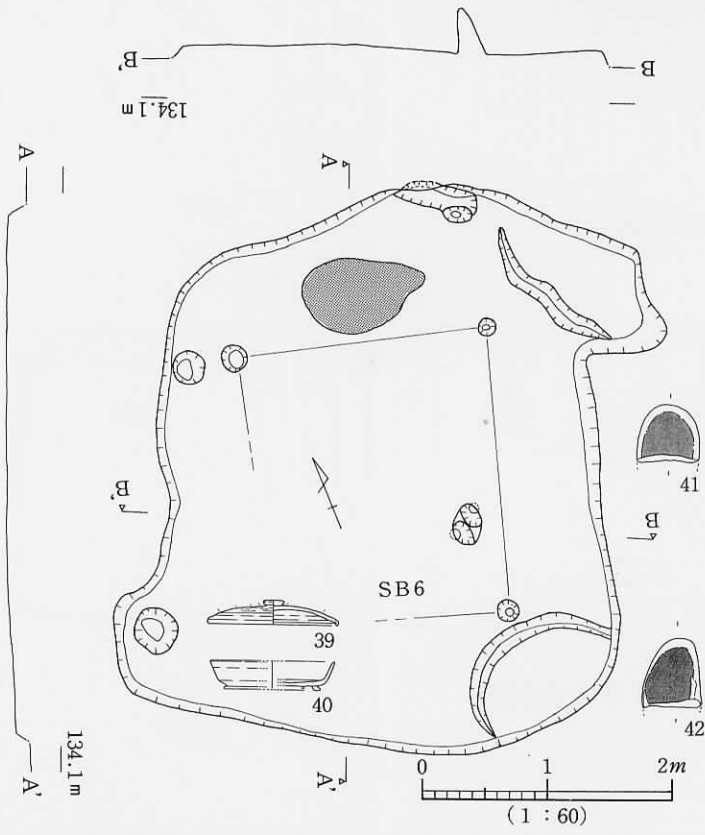


图9 SB6 实测图

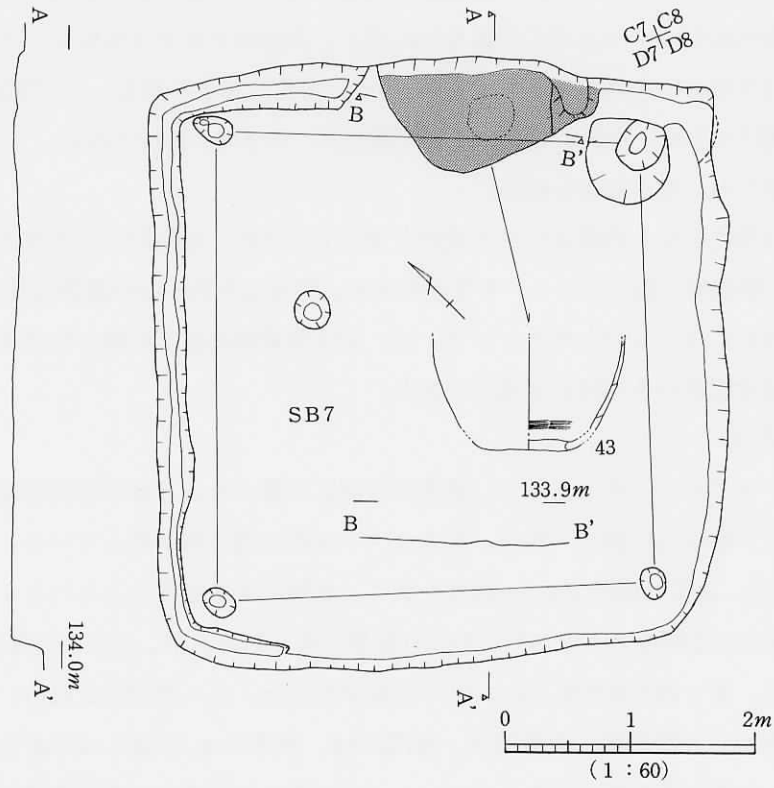


图10 SB7 实测图

古墳時代末（7世紀末）～奈良時代初頭（8世紀前半）に時期を求め得る。当SBの所属時期を示すものである。その他、覆土中からは各時期の遺物が出土している。

SB8 (図11)

A8・9と-A8・9グリッドにおいて、平面長方形のSBが検出された。床面幅は、A-A'断面で約7.1m、C-C'断面で約4.9mを測るやや大型のSBである。検出面から床までの深さは16cm程度のみである。床面はほぼ平坦であり、掘削後の地山面を硬く叩きしめている。床面から8個の柱穴らしき穴と1つの土塚が検出されたが、規則性を見出し難く、支柱等は判然としない。それぞれの穴に浅深はあるが、浅いもので11～18cm、深いもので27～38cmを測る。土塚の深さは10cmであり、何らかの施設であろう。

長軸上に並ぶ形で、2ヶ所の地焼炉らしき焼土の部分が検出された。東側の地焼炉は、東半分が炭の堆積、西半分が焼土であり、炭を除去した後の深さは5cm程である。西側の地焼炉に近い位置の覆土中からは、図に示した30と31の遺物が、南の角に近い部位の覆土最下層、ほぼ床面上からは、32の石包丁が出土した。

30は、朝日遺跡編年Ⅶ期頃に属すると思われる壺の口縁部で、磨耗が著しいものの弥生中期末～後期初頭にかけてのものであろう。31は磨製石鏃で、長さ6.0cm、表裏とも各3面を丁寧に磨き上げ、薄く作り上げている。32の石包丁は長さ15.3cm、1穴を穿ち、刃部の磨耗はよく使用されたことを物語っている。当SBの時期は、これら弥生時代の遺物をもって推すことができる。

SB9 (図11)

-A8・9と-B8・9グリッドからは、平面長方形のSBを検出した。そのSBは、内側の部分的に周溝を有するSBが、後に外側の掘り方で示されるSBに拡張、建て替えられたことを示している。周溝を有する内側の旧SBは、床面幅南北約4.0m、東西約3.4mを測り、周溝幅15～35cm、同深さ3～6cmを測る。SBの検出面からの深さは10～20cmで、建て替え後もほぼ床面レベルを共有している。共有する床面の中央付近は、特に硬く踏みしめられていた。

拡張後のSBの床面規模は、東西4.35m、南北約4.9mを測り、E-E'断面に示す柱穴を支柱にするようである。カマドの位置は、旧SBが東壁辺の北角に、新SBが北壁辺中央のグリッド杭の位置にその焼土の痕跡を留めていた。いずれのSBのカマドについても同じであるが、煮沸用の甕を支える支柱（当地では一般的に長めの川原石が多い）は残存していない。

SBの覆土中からは、古墳時代後期から奈良時代にかけての土器を中心とした遺物が出土している。図化できる資料はないが、本SBの所属時期を7世紀末～8世紀前半と考えている。

SB10 (図11)

調査区の北東の端、A8と-A8グリッドにおいて、平面形が台形状を呈するSB10を検出した。床面の幅は、F-F'断面で5.45m、G-G'断面で4.75mを測り、少なくとも南側の2辺の壁際に周溝を巡らす。SB検出面から床面までの深さは、10cm程度と遺存状況が悪い。床面は硬く叩きしめられていた。壁際の溝は幅20～30cm、深さ5cm程度である。西の隅をSK20がカットしているため、支柱穴の全てを検出できなかったが、4本と推定する。支柱間の距離は、2.7m、3.6mを測る。3つの柱穴の床面からの深さは、北のものが26.5cm、東のものが10cm、南のものが20cmに達する。

北から西に至る壁際にはカマドが造り付けられており、その残欠である焼土の面的集中部分をみた。SBの覆土中からは土師器等の細片の出土をみたが、所属時期の決め手としたのは北にある主柱穴から出土した須恵器の破片である。その中に直径3.4cmを測る坏蓋の宝珠つまみ部分があり、奈良時代前半（8世紀前半）と考えている。

SB11 (図12)

調査区の東端、A10とB10グリッドで、平面方形とみられるSBの一部を検出した。調査区を拡張することができなかつたため、SBの北西部分のみの概略を記す。SBの床面積は、A-A'断面で、5.27mを測り、床面までの深さは残りの良いところで20cm程度である。主柱穴は検出できなかった。SBの南西壁に沿って、貯蔵穴とも推定できる土壇が一部検出できたが、深さが15cm程度という以外不明である。北西辺の壁際に、カマドの残欠が検出できた。覆土中も含めて遺物が少ないだけに唯一の時期を知る手がかりである。

本SBは、古墳時代後期～奈良時代までの幅をもってその所属時期を考える。

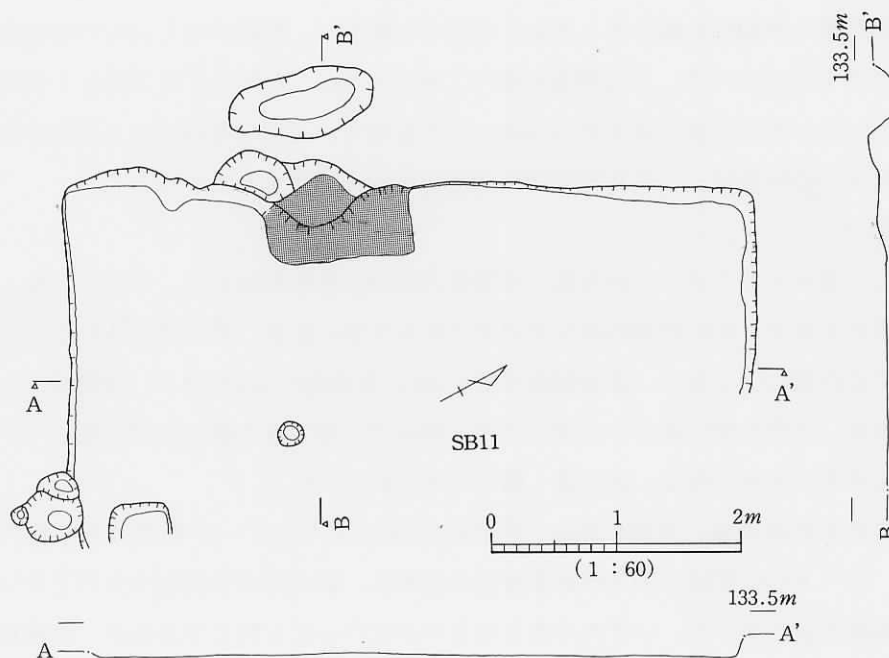


図12 SB11実測図

(2) 掘立柱建物址

掘立柱建物址（以下SH）は、はっきりと柱穴列を確認できたものが4棟、全体を把握できないまでも一部の柱穴列を確認できたものが8列ある。他にもピット群の集中か所（A10・A8・B9・D7・E10グリッドなど）においては、未検出のピットも予想され、何棟かのSHがあったものと考えられる。以下、各棟ごとに概略を記す。

SH1 (図13)

C9、D9グリッドにおけるピット群の中で、唯一SH1の柱穴配列を確認した。近現代の畑耕作

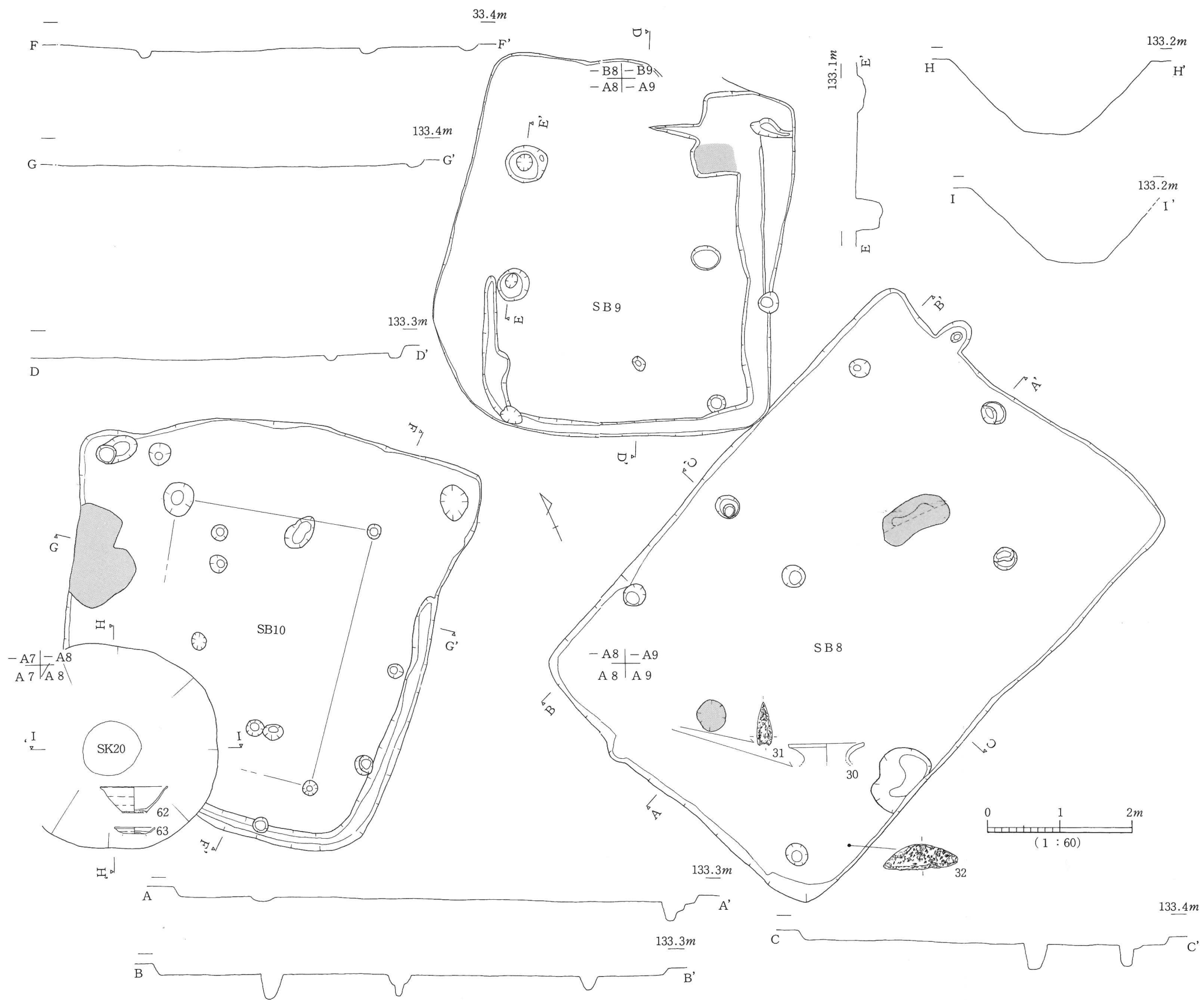


图11 SB8·9·10实测图

による溝址（SD8・9）により建物址の床そのものは全て攪乱されており、不明なピットも多からうが、残存する配列から推定する。

SH1は長軸を北北東に向ける、梁行2-3間、桁行4間の建物址である。柱間は、梁行が2間であれば約1.4m、3間であれば約0.9mで、桁行は1.4~2.0mを測る。検出面においてのピットの大きさは、上面径24~30cm、底面径15~19cmとほぼ一定、深さは15~35cmを測る。

SHの北角の柱穴C9-P2からは、2個体の山茶碗小皿が出土しており、そのうちの1点を85として図示した。小皿の時期は、美濃山茶碗編年（以下編年）の明和1号窯期に属するものであり、鎌倉時代後半（13世紀後半~14世紀初頭）となろう。本SHの時期を示すものと考えている。

また、本柱穴の西側ピット群の内、C8-P2においても、山茶碗の碗が2個体と小皿が8個体、あたかも埋納されたような状態で出土している。いずれも完形品に近く（75~84に図示）、時期もC9-P2のものと同じである。本SHに関連したピット群の一つと考えている。C8-P2の上面径は25cm、底面径13cm、深さ38cmを測る。

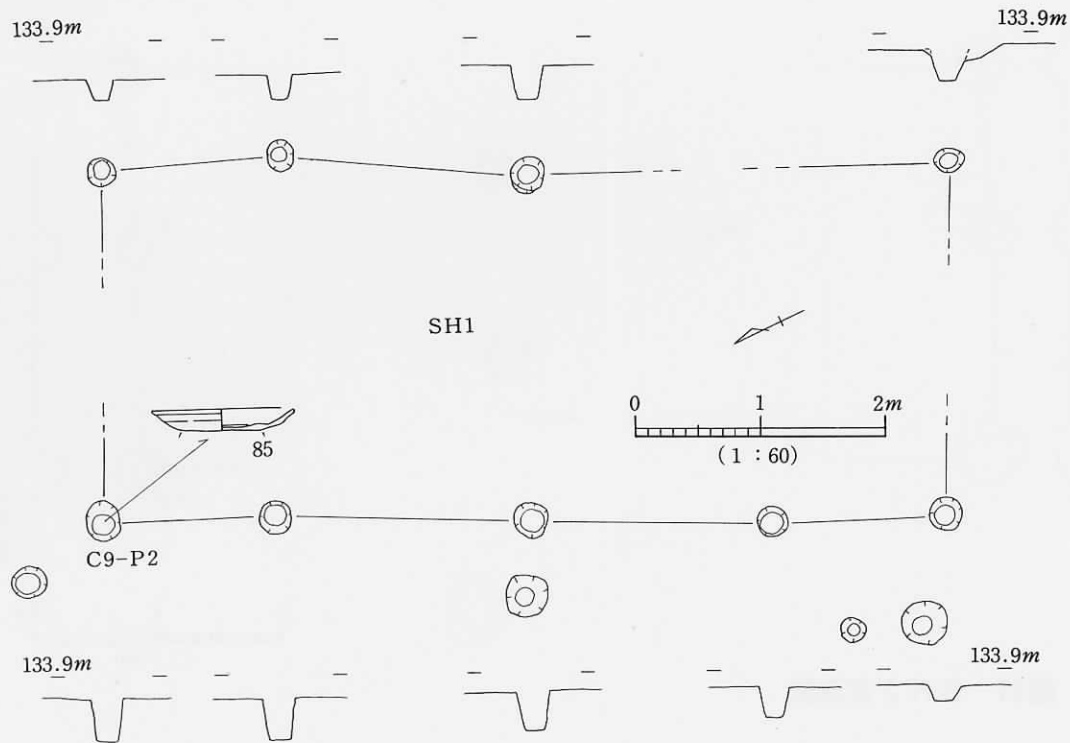


図13 SH1実測図

SH2 (図14)

D10、E10グリッドにおけるピット群の中で、SHになると推定する柱穴配列を確認し、SH2とした。不明なピットも予想されるが、長軸を南北に採り、梁行2間、桁行は不明である。建物の東側の柱穴列は、本SHに付属するものかどうか断定はできないが、付属するとすれば、奥行1m程の軒先の支柱に該当するのかも知れない。

柱間は、梁行が1.3~1.9m、南北の柱間は約6.7mである。検出面においてのピットの大きさは、上面

径29~50cm、底面径10~35cm、深さ13~26cmを測る。軒先とも考えられる柱穴列も含めて、ほぼ揃ったピット群であり、5つの重複するピットの存在から、建て替えの行なわれた形跡もみてとれる。

また、SHの中程やや南寄りでは、短軸に平行して並ぶ2つのピットを検出しており、本SHの柱穴に属する可能性が高いと考える。

本SHに関する柱穴群からは、時期を決定できるに足る遺物の出土はないが、東側のピット群のうち、D10-P1からは編年明和1号窯期の山茶碗が、SK22からは編年白土原1号窯期~明和1号窯期にかけての山茶碗が出土しており、鎌倉時代のSHであろうと推察している。SHの床面そのものは確認していないが、地山面は平坦である。

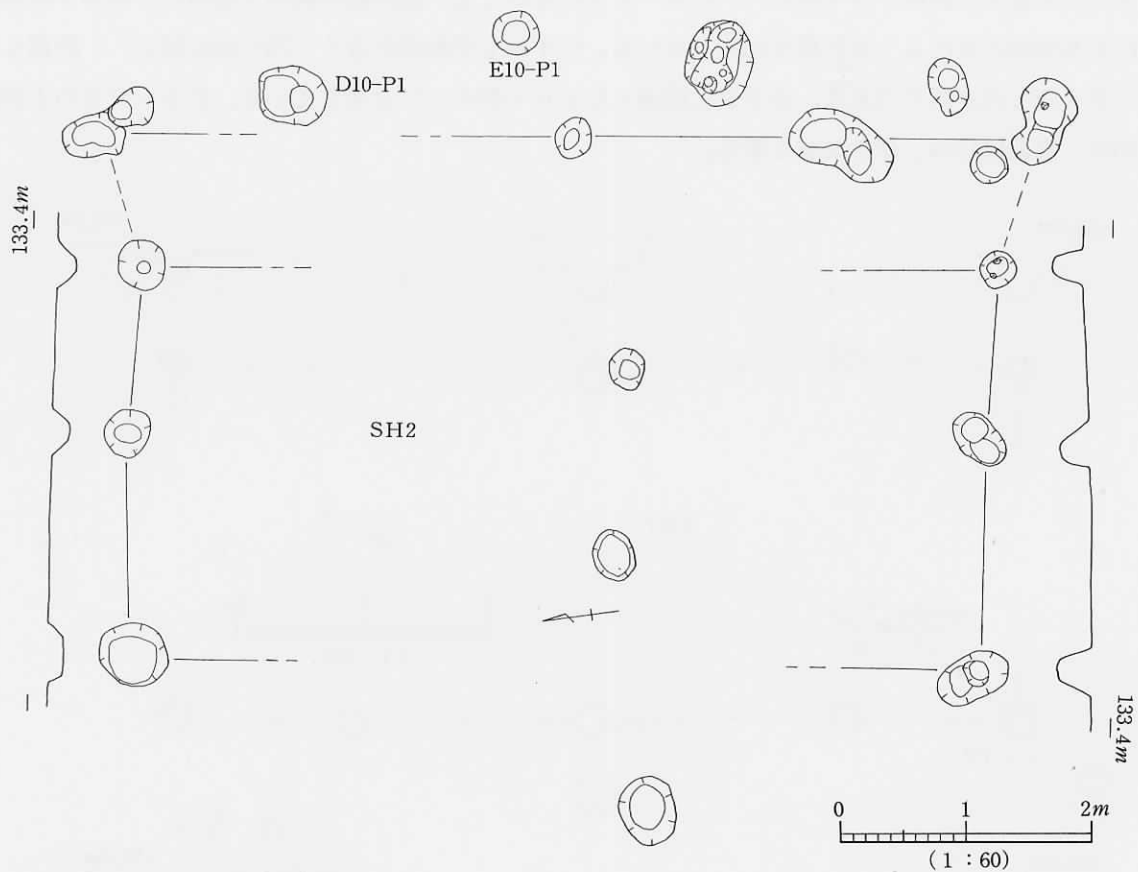


図14 SH2実測図

SH3・4 (図15)

E7、E8グリッド内で検出されたピット群の中で、2棟の重複するSHを確認した。

SH3は、梁行おそらく2間、桁行2間であり、長軸を北西-南東に採る。SHの規模は、約3.0×3.7~3.85mで、桁行の柱間は1.65~2.2mである。検出面においてのピットの大きさは、上面径26~46cm、底面径12~29cm、深さ14~42cmを測り、桁間の中柱の柱穴底が浅い。

SH4も、梁行2間、桁行2間であり、長軸を西北西-東南東に採る。SHの規模は、約3.25×4.65mで、梁行の柱間は1.5、1.7m、桁行のそれは2.25、2.35mである。検出面においてのピットの大きさは、上面径24~38cm、底面径12~20cm、深さ16~34cmを測る。

前後関係は不明であるが、建て替えのSHと推定され、床面積をより広く採ったのであれば、SH 3からSH 4の可能性が高くなる。図示できる柱穴出土の遺物はないが、図15に番号を示したピットからは、後頁の出土遺物表に掲げる遺物の細片が少量出土している。それによれば、SH 3・4いずれに関するピットからも共通して奈良時代の須恵器片がみられ、本SHの時期を示すものと考えている。確たる床面の検出はできていないが、少なくとも地山面はフラットである。

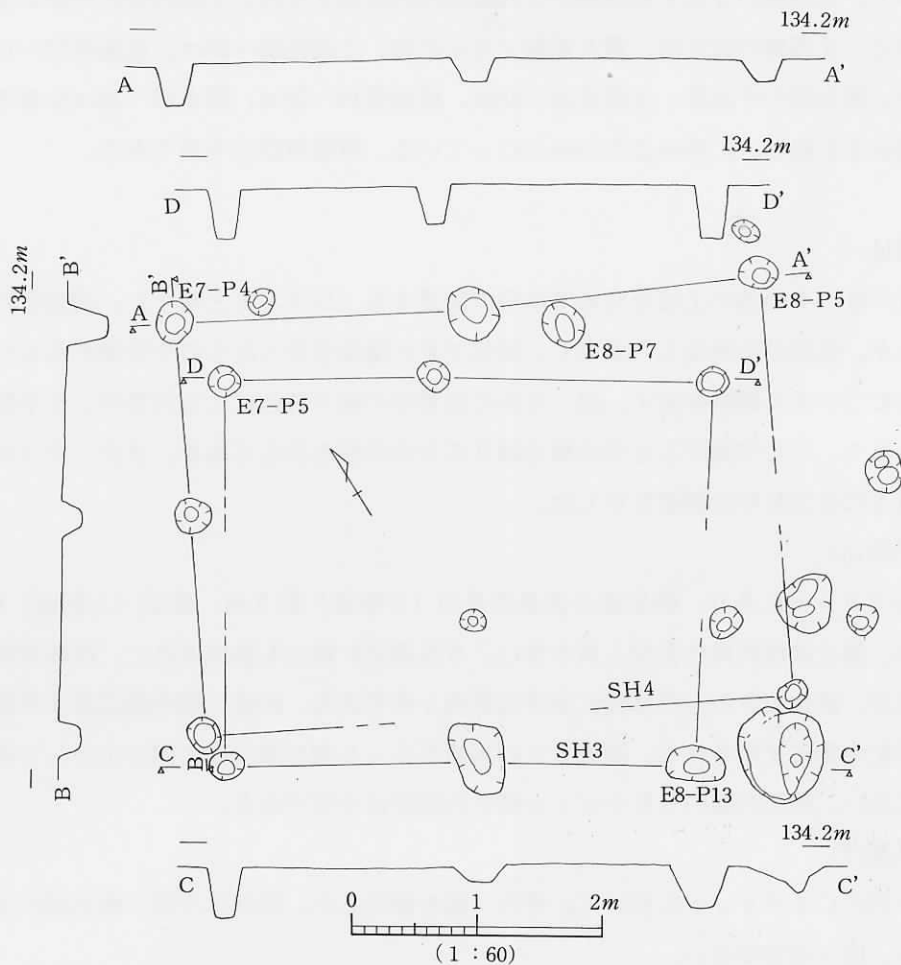


図15 SH 3・4実測図

その他の柱穴列 (図3)

A 8からB 8グリッドにかけてのピット群の中で、3間に亘る柱穴列を確認した。柱間は2.45~2.6m、柱穴の上面径28~34cm、底面径15~20cm、深さ27~35cmでほぼ均一である。調査区の西側に対応する柱穴列の存在が予想される。長軸は南北に採るものと推定する。これらの柱穴からの出土遺物はなく、所属時期は不明である。

A10から-A10グリッドにかけても4列の柱穴列を確認した。A10のものは、北西-南東方向の2間に亘るものと、これに直交する南西-北東方向の4間に亘るものである。いずれもほぼ均一な穴の大きさ、深さを有する。-A10グリッドのものは、南南西-北北東に3間分の列を採り、これと平行する柱穴列も1間分検出した。このピット群は、柵列とも考えられる。時期は不明。

ーB10グリッドにおける北西ー南東方向のピット群も、柱穴列である可能性を考えているが、判然としない。調査区の北東側に続くものと推定する。時期不明。

D7とE7グリッドにおいても、東西方向と北西ー南東方向のピット列を、それぞれ2間分検出した。ピットの大きさ等は揃うものの、詳細は不明。

第1レンチ内においても、後世の溝と重複しながら5間に亘るピット列を検出している。その配列や柱間からみて、北西側の3穴と南東側の3穴は別の列と考えられ、2間の柱穴列が2本とした方が良さそうである。北西側の柱穴は、溝と重複するものの、上面径23~28cm、底面径12~15cm、深さ11~15cmを測り、南東側のそれは、上面径34~58cm、底面径16~25cm、深さ17~48cmを測る。柱間はそれぞれ、1.35mと1.45m、2.35mと2.55mとなっている。所属時期は不明である。

(3) 土塚址

土塚墓、井戸址、その他の土塚を含めて本項で記述する（以下SKと略す）。調査区のほぼ全域から検出されたが、性格の不明なものが多く、図化できた遺物を伴ったものや特徴あるもの、性格を推定できるものについての概略を記す。尚、SKには番号の振り替えによる欠番や、不手際による該当不明なものもあり、ここで掲げるものは極力図3にその所在を示してある。また、表3には出土遺物の集計を、表1にはSKの計測値を示した。

SK1 (図16)

AーA10グリッドにあり、検出面の法量は長辺(B断面)約3m、短辺(A断面)約2.5m、深さ26cmを測る。覆土は淡灰褐色を呈し炭を含む。SK周辺に焼土も検出された。ほぼ全時期に亘る遺物を包含するが、図化できたものは60に示す山茶碗1点である。60は、編年脇之島3号窯期に属するもので、15世紀中葉に比定される。床面近くの川原石5ー6個を除去した際に出土しており、本SKの所属時期に近い。周辺の他のSKやピット群との関係は不明である。

SK7 (図17)

第1レンチ内のC4グリッドにおいて、その一部を検出した。形状は不明、検出部の上面の長さは約2mを測る。出土遺物はない。

SK11 (図17)

B8グリッド内の楕円形プランを呈する土塚。上面155×88cm、深さ26cmを測り、縄文土器片や剝片を覆土に多く含んだ。所属時期を示すものと考えられる。

SK15 (図16)

第3レンチ内のK6・7グリッドにおいてその一部を検出した。検出部の上面径は88cm、深さ80cmを測る。覆土上面に炭を含む赤褐色の焼土層を検出。中世に属するものと推定している。46の砥石出土。

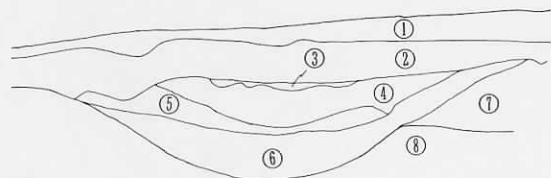
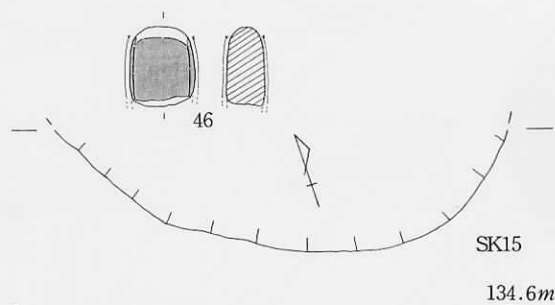
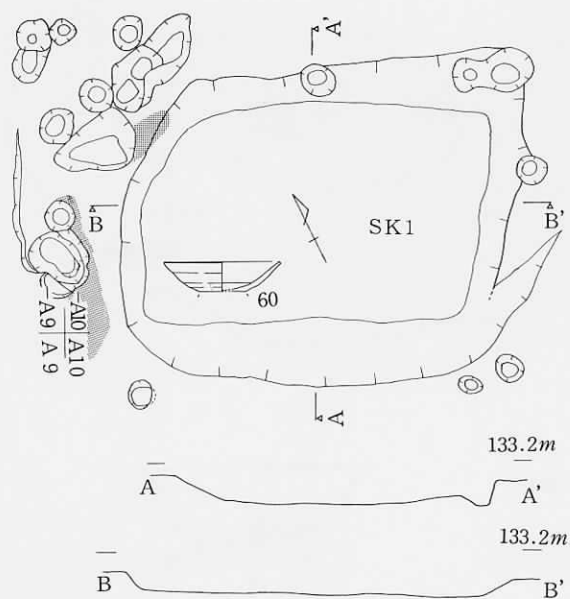
SK16 (図17)

F10グリッド内にあり、検出面において長径74cm、短径40cm、深さ13cmを測る楕円形プランのSK。

SK17 (図17)

D10グリッド内にあり、検出面において長径89cm、短径78cm、深さ14.5cmを測る円形プランのSK。

SK18 (図17)



層序

- ① 灰褐色土(表土)
- ② 灰黃褐色粘質土(攪乱)
- ③ 赤褐色燒土·炭含む
- ④ 灰黃土色粘質土(覆土)
- ⑤ 淡灰褐色粘質土(")
- ⑥ 淡黃土色(")
- ⑦ 暗黃褐色粘質土(地山)
- ⑧ 黃褐色粘質土(")

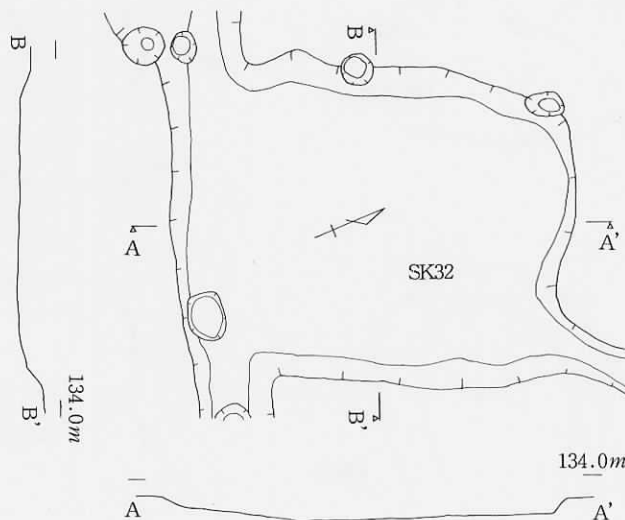
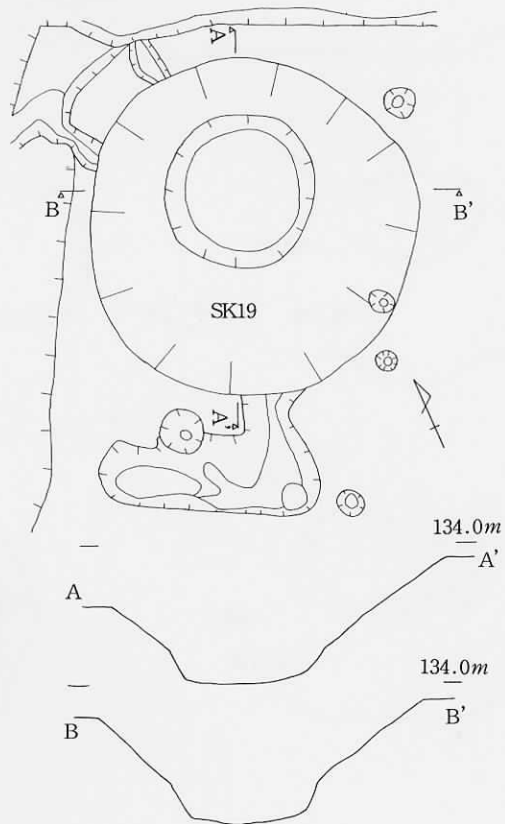
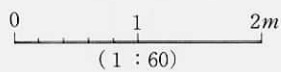


图16 SK实测图(1)

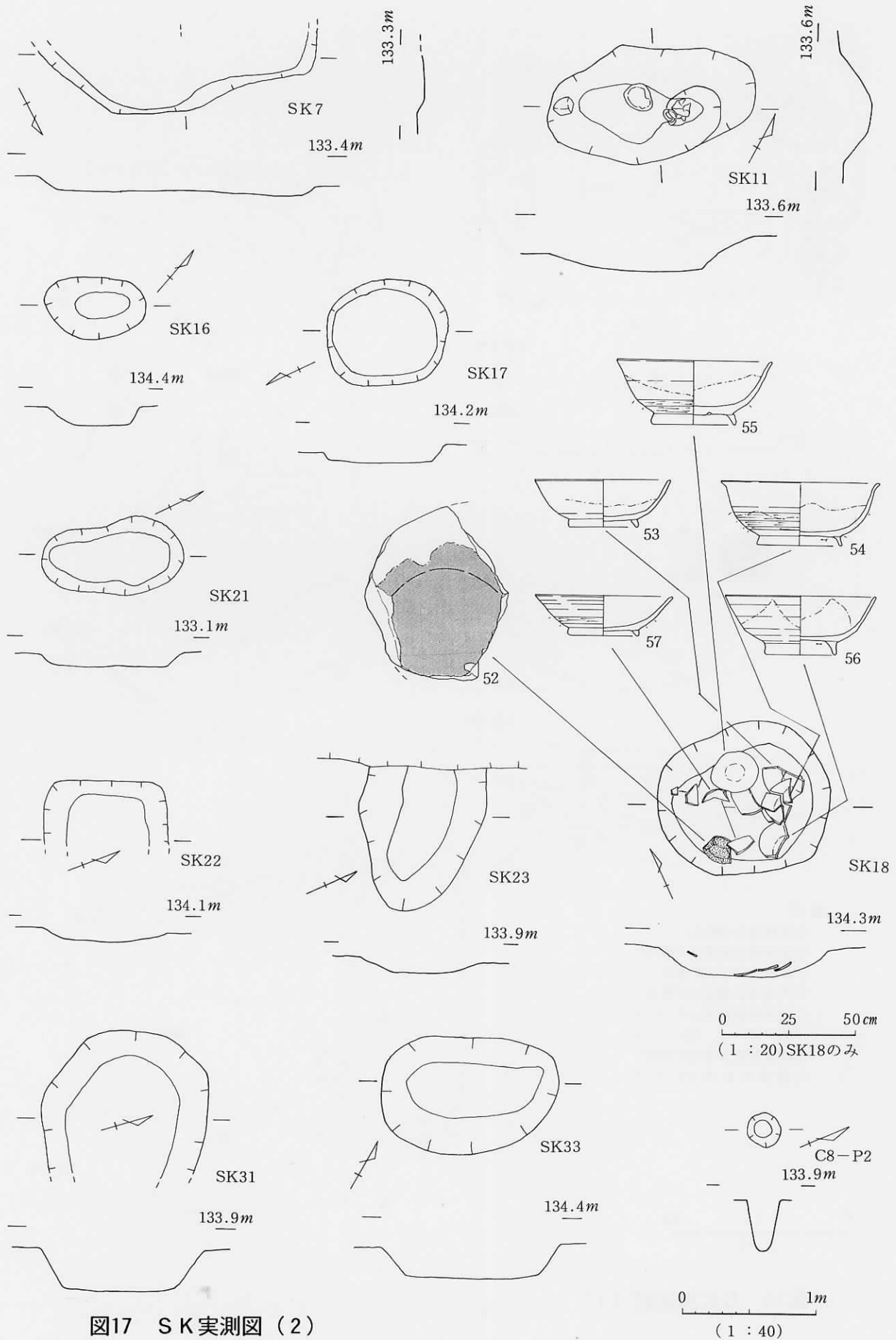


図17 SK実測図(2)

E10グリッド内、SH2の南側に隣接して円形プランのSKを検出した。検出面においては、長径64cm、短径55cm、深さ17.5cmを測る。SK内の底面に近い位置より、平安時代の白瓷碗類が6個体と川原石を加工した砥石(52)が、折り重なるようにして出土した。本SKに意図的に埋納、或いは保管されていたものと考えられる。図示した白瓷53~57は、美濃白瓷編年(以下編年)の虎溪山1号窯期に当たり、11世紀前半の年代が与えられる。

尚、58の白瓷皿も同グリッド内のピットからの出土を示すが、本SKからの出土とみている。

SK19 (図16)

E7グリッドにおいて、検出面直径約2.6mの円形プランを呈する井戸址とみられる遺構を検出した。深さは約1mを測り、二段掘りされている。木枠等木質物の出土はなく、単に素掘りの施設か。周辺のピット群は、覆屋の存在を推定させる。覆土からは幅広い時代の遺物片の出土をみるが、新しい遺物を採用すれば、近世に属するものとする。

SK20 (図11)

A8グリッドにおいて、SB10をカットする円形プランのSKを検出した。SK19とよく似ており、井戸址と推定する。検出面直径約2.9m、深さ約1mで、二段掘りはされない。覆土中出土の遺物は鎌倉時代以前を示し、62と63の山茶碗は編年明和1号窯期(13世紀末~14世紀初頭)に属する。本SKの所属時期を示すものと考えている。

SK21 (図17)

A8グリッドで検出された楕円形プランのSKで、検出面での長径約1m、短径58cm、深さ約8cmを測る。所属時期は不明。

SK22 (図17)

D10グリッド内、調査区の東端、SH2の近くでSKの一部を検出した。断面図の位置で上面幅93cmを測る。深さは10cm程度の遺存であるが、山茶碗類79個体以上が出土した。図示できたものはその内の11個体で、64~74に掲げた。これらの遺物は、編年窯洞1号窯期~明和1号窯期に属し、新しい方を採って、鎌倉時代後半の13世紀末~14世紀初頭を当てることができよう。SH2との有機的関係を想像している。

SK23 (図17)

D7グリッド、調査区の端で、楕円形プランらしいSKを検出した。検出面の断面位置における幅は95cm、深さ16cmを測る。所属時期は不明。

SK31 (図17)

C10グリッド、調査区の端で、楕円形プランらしいSKを検出した。検出面の断面位置における幅は約1.2m、深さ32cmを測る。所属時期は不明。

SK32 (図16)

D9・10グリッドにおいて検出した。約3.2m×2.6m、深さ18cmの長方形プランを呈し、3方向への溝に接続する。溝址と共に、近現代の畑耕作に伴う水溜のための施設と考えられる。

SK33 (図17)

F10グリッド内の楕円形プランのSK。長径約1.3m、短径0.9m、深さ25cmを測る。所属時期は不明。

(4) その他の遺構と遺物

溝 址 (図3)

調査区の数ヵ所において、溝址の大部分、或いは一部を検出しているが、そのほとんどは近世以降、近現代の畑耕作に伴う区画溝、排水溝、貯水溝と考えられ、省略することにする。

ピット (図3・17)

掘立柱建物址の項で触れなかったピットのうち、図化した遺物を出土したものについて述べる。

SD6の東、C10グリッドにあるC10-P1からは、86~88に示す山茶碗が出土している。86は編年白土原1号窯期、87は明和1号窯期、88も同期の小碗と考えられる。またその東側にあるC10-E1-Pからも、89に示す山茶碗の小皿が出土している。明和1号窯期に属する。49・50はE8-P2出土の奈良時代の須恵器である。

112に示した江戸時代の連房式登窯製の灰釉碗は、SB1の北のSD1内から出土したものである。

以下、遺構に伴わない包含層出土の遺物と、遺構の覆土ではあるが紛れ込みと考えられる遺物について概略を記す。表4の遺物観察表も参照されたい。

縄文時代の遺物 (図18)

石鏃類は14点出土しているが、未成品(8)も含め10点を図示した(1~10)。形態的には、凸基のもの1点、凹基のもの5点、平基のもの3点、木葉形を呈するもの1点である。石材別では、チャート8点、下呂石安山岩4点、黒曜石2点となる。

石匙は4点のうち3点を図示(11~13)した。11と12がチャート製、13は下呂石製の未成品である。

スクレイパーは3点(14~16)、いずれもチャート製で、14は顕著な横長の翼状剥片を利用している。

17は、黄味がかかった半透明の石を耳飾として研磨加工したもので、約半分が破損している。扶状耳飾の類と考えている。小孔は破損後の接合用の補修孔と考えられる。SB2の近くから出土した。

18は磨製石斧の未成品。片側面のみ研磨の工程途中である。

表1 SK一覽表 (cm)

No	区	形状	長辺×短辺×深さ	備 考
SK1	-A・A10	長 方	307×252×26.3	遺物(60)
4	C5・6	長楕円	394×59×13.3	近現代の畑址
5	〃	長楕円	390×64×12.6	〃
6	〃	長楕円	(174)××(8.2)	〃
7	C4		(205)××(12.7)	
11	B8	楕 円	155×88×26.3	縄文
13	I4		××(13.8)	
14	K9	(方)	100××(18.6)	
15	K6・7	(円)	(88)××(80)	中世,遺物(46)
16	F10	楕 円	74×46×12.7	
17	D10	円	89×78×14.5	
18	E10	円	64×55×17.5	平安,遺物(53~58)
19	E7	円	267×262×99.4	近世,井戸
20	A8	円	290×287×100.8	鎌倉,井戸,遺物(62,63)
21	-A8	楕 円	103×58×7.7	
22	D10	(方)	(93)××(10.1)	鎌倉,遺物(64~74)
23	D7	(楕円)	×(95)×(16)	
31	C10	(楕円)	×122×32.3	
32	D9・10	長 方	323×259×18.5	近現代の畑耕作貯水
33	F10	楕 円	131×88×25.1	

表2 石器、剥片等集計表 (個)

種類	剥片(%)	石核(%)	石 鏃	石 匙	スクレイパー	計(%)
チャート	273(89.5)	58(95.1)	8	3	3	345(89.1)
安山岩	26(8.5)	1(1.6)	4	1		32(8.3)
下呂石		1(1.6)				1(0.3)
黒曜石			2			2(0.5)
その他	6(2.0)	1(1.6)				7(1.8)
計	305(100)	61(100)	14	4	3	387(100)

※ 石器には未成品含む

打製石斧は10点の出土をみるが、内6点(19~24)を示した。変成岩が多用されている。23は長さ18.5cm、幅5.9cmを測る完成品であるが、使用の痕跡はない。

25の縄文土器はSB4出土のもの。晩期と考えられる甕である。

出土した剥片や石核に小型石器も含めて、その石材利用の状況を表2に示した。これによれば、チャートの利用状況が極めて高く、実に89%に達する。次は下呂石の8%であり、チャートが圧する。

弥生時代の遺物についてはSB3とSB8の項で、古墳時代後期以降の遺物についてもそれぞれの項で述べたものは略す。

その他の遺物 (図20~22)

47はA9グリッド出土の砥石で砂岩を利用。3面を使用している。48も砥石で泥岩質、2面を使用するが、左側の面は中央が凹み、右側の面は平らである。使用による傷が細線状に観察できる。

51はSB4の覆土から出土しているが、短脚化した7世紀末の須恵器高坏である。

出土した白瓷や山茶碗類は、ほぼ全て地元産とみられる胎土であり、北部系として多治見市~可児市内の焼成品であろうと考えている。90~92は編年白土原1号窯期に、93と94は同期~明和1号窯期に、95~103は明和1号窯期に属する。碗や皿の内面底部にはユビナデによるスリケシ痕、糸切り底の高台内や底面には乾燥時に置いた際の板目状圧痕が観察できる。小碗が器種として成立したり、オロシ碗や陶丸がみられるのも白土原1号窯期以降である。69、88、98は小碗、103はオロシ碗、109は陶丸である。104、105はそれらに続く編年大畑大洞4号窯期、106、107は碗の高台消失時期である編年大洞東1号窯期に、108は編年脇之島3号窯期に属する。110は山茶碗窯で焼かれたものとみるが、器表面にヒモ状の突帯を付けた破片、111は内面底部に4条の同心円文が凸線としてある土師皿である。112はSD1のピット内から出土した江戸時代の灰釉丸碗である。

表 3-1 二野東段遺跡出土遺物表

遺構又は 出土区	縄			文		弥生		古墳前半期		古墳後半期		奈良		平安			室町		桃山以降		中世他	時期他	
	土器	石斧	石鏃	石核	石片	石器	土器	須恵	須恵	土師器	須恵	土師器	須恵	須恵	白瓷皿	白瓷	山茶碗	山皿	山茶	古瀬戸	瀬戸	砥石	
SB1-T												1											古墳(7C)
SB1-F						1						1	1				3↑				2		
SB1-P												1					2				1	1	
SB2-K							1					3											古墳(7C)
SB2-CP					4							1											
SB2-P4					3				1			1											
SB2-F	2	1	6	1	53	11			1	4	9	5	5↑	10↑	4	5	3↑	2			2	2	
SB3-T							2																弥生
SB4-F	2	1			1	10	1				1						4↑	2	2		6		縄文
SB5-F	2↑		1		5					1			1↑				1↑						縄文
SB6-K													2↑										奈良
SB6-F					1	8	1		1	2	2	1	1	3	3	1	3				1	2	
SB7-K													3										古墳末~奈良
SB7-F					7	2					2	2	1	3	1								
SB8-F					1	9	1																弥生
SB9-S																							古墳末~奈良
SB9-F					3	1				1	3	1	1	4					1				
SB10-P																							奈良
SB10-F												2	2	2			2						
SB11-F													1↑				2				1	1	
SK1F					1	13	1			1	1	1	1	1	1	2	1	9↑	1	2	1	2	室町
SK8																							
SK9																							
SK10						2							3	1	5↑								
SK11	5					12	1																縄文

凡例
 ※「石鏃」には、二次加工のある未成品を含む
 ※「須恵環」には、蓋と身を含む
 ※「その他石器」は、石配と装身具、磨石、スクレイパー
 ※「その他山茶」は、鉢や陶丸等、山茶碗窯で同時焼成されたもの
 SB1-T (1号住居址床面) SK (土 塚)
 SB1-F (須恵環) P (ピット)
 SB2-CP (2号住居址貯蔵穴) SD (溝)
 SB2-K (カマド) A8 (A8グリッド)
 SB9-S (9号住居址周溝) IT (第1トレンチ)

表 3-3-3 二野東段遺跡出土遺物表

遺構又は 出土区	總 文				弥 生		古墳前半期		古墳後半期		奈良		平 安				室 町		桃山以降		中世地	時 期 他			
	土器	石斧	石鏃	石核	壺	その他 土器	石器	瓦	その他 土器	須恵	須恵	須恵	須恵	白瓷	白瓷	山漆	山漆	山皿	その他 山茶	古瀬戸	その他	瀬戸 美濃	その他	砥石	
E 7-P 5											1														奈
E 8-P 2											2														奈
E 8-P 3								1							2										奈
E 8-P 5										1															奈
E 8-P 7										1															奈
E 8-P13										1															奈
E 10-P										4	2	1													平
4 T-P 1										4															安
SD 1-P																						1			
-B 10		3	1	8				1	1	2	3				3†	1	1	2				4			
-B 9		1		2	1			3		2	3				8†		2					8			
-B 8				4	3			1	4	5	1	6	2	2	1	64†	3†	5	6	5		42			
-A 10				1						1		1				5						1			
-A 8				3	4						2	2	4									4			
A 8			1	1				3	2	5	4	2	2	1	1	16†	5	2	3			10		1	
A 9 1				4								1		1	2†	1						1		1	
A 10				2									1		2†							2			
B 5												2			2			1				1			
B 8											2	1	1	2	2							1			
B 9	1			2				1	1	1	2	1	2	2	2										
B 10															2							1			
C 8				3	1						1				6†		3		2			20			
C 9	1			8	1			2				1		4	1	1	4					3			
C 10				21	1				1		2	2	1	2	10†	2						4			
D 7				2				1	3	4	2			1		3						1			

凡例 SB1-T (1号住居址床面) SK (土 塚)
 SB1-F (〃 覆土) PI (ピ ッ ト)
 SB2-cp (2号住居址貯蔵穴) SD (溝)
 SB2-K (〃 カマド) A 8 (A8グリッド)
 SB9-S (9号住居址周溝) I T (第1トレンチ)

※「石鏃」には、二次加工のある未成品を含む
 ※「須恵坏」には、蓋と身を含む
 ※「その他石器」は、磨石、スクレイパー
 ※「その他山茶」は、鉢や陶丸等、山茶碗蓋で同時焼成されたもの

表4-1 遺物観察表

単位cm、復元値含む T:床 F:覆土

遺物 番号	遺物名	遺構	グリッド	位置	法 量			成・整形・調整	図化部 残存率(%)	その他特記事項等
					口径	器高	その他			
1	石 鉢	(SB2)	E9	F			現長2.6、幅1.2	凸基		下呂石
2	"		D10				現長2.0、現幅1.2	凹基		チャート
3	"		D8				長2.7、現幅1.7	"		下呂石
4	"	(SB2)	E9	F			現長2.4、幅1.4	"		"
5	"			表採			現長1.2、現幅1.2	"		チャート
6	"	(SB2)	E9	F			現長1.7、現幅1.4	"		黒曜石
7	"	SB5	C5				現長3.9、現幅1.7	平基?		チャート
8	"		D9				長2.9、幅2.0	平基		"、未成品
9	"			表採			現長2.2、幅1.9	"		"
10	"	(SB2)	E9	F			現長3.0、現幅1.9	木葉形		"
11	石 匙		3T				現長2.7、現幅3.1			"
12	"	(SB8)		F			現長2.8、現幅2.9			"
13	"	SB4		F			現長3.2、幅3.7			下呂石、未成品
14	スクレイパー	(SB3)	-B10	F			長2.9、幅7.1			チャート、横長剥片
15	"		5T				長2.7、幅5.5			"
16	"	(SK1)	-A10	F			長2.3、幅3.6			"
17	耳 飾	(SB2付近)	E9				現長1.5、幅1.0			孔は補修孔か
18	磨製石斧		F10				現長4.8、幅6.0			未成品
19	打製石斧		B9				現長5.6、幅3.4			未成品?
20	"		-B9				現長5.7、幅5.7			未成品
21	"	(SB3)	-B10	F			現長3.7、現幅3.8			破損
22	"	"	"	F			現長9.1、幅4.5			"
23	"	"	"				長18.5、幅5.9			未使用
24	"						現長13.5、幅6.3			破損
25	縄文一甕	SB4						表面条痕文		晩期
26	弥生一付甕	SB3		F					40	反転、磨耗
27	弥生一壺	"		F			底径推8.0		30	"、"
28	弥生一壺	"	-B10			22.9			80	磨耗、口縁内面列点文、後期
29	弥生一付壺	"	-A10				底径14.8		80	磨耗、内面ハケ
30	弥生一壺	SB8		F	復15.3			口縁内面櫛刺突文	40	反転、磨耗
31	磨製石鉢	"		F			長6.0、幅2.1	表裏各3面研磨		弥生
32	磨製石包丁	"		T			長15.3、幅5.2			弥生
33	土師一甕	SB1	C5	CP	復21.5			頸部内面ハケ	30	反転、磨耗
34	須恵一坏蓋	SB2	E9		推12.3	推4.3		外面左回転ケズリ	50	"
35	"	"	"		復16.4			外面右回転ケズリ	30	"
36	須恵一壺	"	"		復10.7		肩径復18.4		20	"
37	砥石	"	"				現長13.0、幅6.9			川原石、1面使用
38	"	"	"				長10.0、幅2.2			"、2面使用
39	須恵一坏蓋	SB6	D8	F	15.7	2.9		外面軽いケズリ	50	
40	須恵一坏身	"	"	F	復14.9	3.4	高台径復11.6	高台内静止ヘラケズリ	30	反転
41	砥石	"	"				現長6.9、幅7.5			川原石、1面使用
42	砥石	"	"				現長8.2、幅7.1			"、"
43	土師一甕	SB7	C7	K			底径8.5	内面ハケ、ナデ	40	胸部反転、磨耗
44	須恵一坏身	SK13	I4		復10.7	4.0	高台径7.2	高台内回転ヘラケズリ	50	反転
45	須恵一高坏	"	"				脚径10.4		90	
46	砥石	SK15					現長9.5、幅7.8			4面使用
47	"		A9				長14.1、幅6.3			3面使用
48	"		A8				長8.0、幅6.2			2面使用
49	須恵一坏蓋	P2	E8				つまみ径2.9	外面自然釉、ケズリ	30	
50	須恵一坏身	"	"		推13.9	4.2	高台径推9.9		10	反転
51	須恵一高坏	(SB4)		F					30	"
52	砥石	SK18	F10				現長19.4、現幅15.7			転用品?
53	白瓷一鉢	"	"		14.9	5.2	高台径7.6	高台内軽いケズリ	50	虎溪山-1
54	"	"	"		復17.6	7.0	高台径復9.3	右回転ケズリ	50	反転 "
55	"	"	"		17.1	7.0	高台径9.0	左回転ケズリ、高台内糸切痕	100	ゆがみ "
56	"	"	"		16.7	6.4	高台径7.6	高台内軽いケズリ	50	反転 "

表4-2 遺物観察表

単位cm、復元値含む T:床 F:覆土

遺物番号	遺物名	遺構	グリッド	位置	法 量			成・整形・調整	図化部 残存率(%)	その他特記事項等
					口径	器高	その他			
57	白瓷一 碗	SK18 E10-P	E10		15.3	4.4	高台径7.7	右回転ケズリ	100	虎溪山-1
58	〃 一 皿	P	〃		12.8	3.1	高台径6.4	高台内ケズリ後ナデ	60	反転 〃
59	白瓷? 瓶類	(SB7)	C7	K付近			底径復10.9	外面回転ケズリ、 内面ナデ	40	
60	山茶一 碗	SK1	-A10	F	13.8	3.5	底径5.4	回転糸切底	30	反転、無高台、脇之島-3
61	〃	SK13	I4		復13.9	5.0	高台径4.9	回転糸切底、 内面底スリケン	50	〃、板目状圧痕、明和-1
62	〃	SK20	A8		復13.8	5.4	高台径復4.9	〃 〃	30	〃、〃、〃
63	山茶一小皿	〃	〃		復7.9	1.4	底径復4.5	〃 〃	50	〃、〃、〃
64	山茶一 碗	SK22	D10		復13.4	6.4	高台径6.2	〃 〃	30	〃、板目状圧痕、窯洞-1
65	〃	〃	〃		13.4	6.7	高台径5.2	〃 〃	20	〃、白土原-1
66	〃	〃	〃		復14.0	5.8	高台径復5.6	〃 〃	40	〃、〃
67	〃	〃	〃		復14.0	5.7	高台径5.2	回転糸切底、 内面底スリケン	50	〃、板目状圧痕、〃
68	〃	〃	〃		14.3	5.7	高台径5.7	〃 〃	70	〃、〃
69	山茶一小碗	〃	〃		復12.3	5.2	高台径5.2	〃 〃	40	反転、〃、〃
70	〃	〃	〃		復12.2	5.1	高台径4.7	〃 〃	40	〃、ゆがみ、〃
71	山茶一小皿	〃	〃		復8.2	1.1	底径4.5	〃 〃	40	〃、板目状圧痕、明和-1
72	〃	〃	〃		復8.5	1.4	底径4.9	〃 〃	70	〃、〃
73	〃	〃	〃		復8.3	1.2	底径復4.4	〃 〃	40	〃、板目状圧痕、〃
74	〃	〃	〃		復8.2	1.0	底径復5.0	〃 〃	30	〃
75	山茶一 碗	P2	C8		13.1	5.4	高台径5.0	〃 〃	80	〃、〃
76	〃	〃	〃		13.5	4.6	高台径4.8	〃 〃	70	〃、〃
77	山茶一小皿	〃	〃		8.4	1.6	底径4.3	〃 〃	100	底部補修、板目状圧痕、〃
78	〃	〃	〃		8.0	1.7	底径4.4	〃 〃	100	〃、〃
79	〃	〃	〃		8.4	1.5	底径4.6	〃 〃	100	〃、〃
80	〃	〃	〃		復8.4	1.2	底径復4.4	〃 〃	40	反転、〃、〃
81	〃	〃	〃		8.5	1.3	底径4.6	〃 〃	100	〃、〃
82	〃	〃	〃		8.4	1.5	底径4.5	〃 〃	100	〃、〃
83	〃	〃	〃		8.0	1.6	底径5.0	〃 〃	100	〃、〃
84	〃	〃	〃		7.3	1.5	底径4.3	〃 〃	100	〃、〃
85	〃	〃	C9		8.2	1.2	底径4.8	〃 〃	50	反転、〃
86	山茶一 碗	P1	C10		13.9	5.2	高台径4.9	〃 〃	60	板目状圧痕、白土原-1
87	〃	〃	〃		13.0	5.5	高台径4.7	〃 〃	80	反転、〃、明和-1
88	山茶一小碗	〃	〃		12.5	4.7	高台径3.9	〃 〃	50	〃、〃、〃
89	山茶一小皿	P	C10-E		8.2	1.4	底径4.6	〃 〃	100	〃 〃
90	山茶一 碗	〃	-B8				高台径5.9	〃 〃	60	反転、〃、白土原-1
91	〃	〃	〃		復13.7	5.1	高台径4.8	〃 〃	40	〃、〃、〃
92	山茶一小皿	〃	4T		8.2	1.4	底径4.6	〃 〃	80	〃、〃
93	山茶一 碗	〃	-B8				高台径5.2	〃 〃	80	板目状圧痕、 白土原-1~明和-1
94	〃	〃	〃				高台径5.1	〃 〃	70	〃 〃
95	〃	〃	〃				高台径4.6	〃 〃	90	〃、〃
96	〃	〃	〃		復14.3	5.7	高台径5.1	〃 〃	25	反転、〃、〃
97	〃	〃	G9		復14.2	4.6	高台径4.8	〃 〃	30	〃、〃、〃
98	山茶一小碗	〃	-B8		復11.9	4.7	高台径4.4	〃 〃	30	〃、〃、〃
99	山茶一 碗	(SB1)		F			底径4.9	無高台、 〃	40	反転、窯道具の蓋を 転用、〃
100	山茶一小皿	(SB3)		F	8.6	1.4	底径5.5	回転糸切底、 〃	100	板目状圧痕、 〃
101	〃	(SB2)		F	復8.3	1.3	底径5.0	〃	20	反転、 〃
102	〃	〃	-B8		8.3	1.5	底径4.8	〃	20	〃、 〃
103	山茶一 碗	〃	〃							オロシ碗、 〃
104	〃	〃	D9		復14.2	5.0	高台径4.5	回転糸切底、 内面底スリケン	40	反転、板目状圧痕、大畑大洞-4
105	〃	〃	-B8				高台径4.3	〃 〃	20	〃 〃
106	〃	〃	E7		11.5	3.8	高台径3.5	〃	100	板目状圧痕、大洞東-1
107	〃	(SB4)	B8、B9		12.0	3.9	底径4.3	回転糸切底、 内面底スリケン	70	無高台、 〃、〃
108	〃	〃	D7・9		復13.4	4.6	底径復5.8	回転糸切底	30	反転、無高台、脇之島-3
109	陶 丸	(SB9)		F			直径2.5	手捏ね	100	
110	山茶一 ?	〃	5T					紐状の貼付突帯		
111	土師一小皿	(SB11)		F	9.7	1.6	底径5.2	回転糸切底	50	内面に同心円状の隆帯4条
112	灰 釉 碗	SD1-P	1T-C4		復12.2	7.3	高台径5.5	胴下部以下ケズリ	50	反転、高台底施釉ケズリオトシ

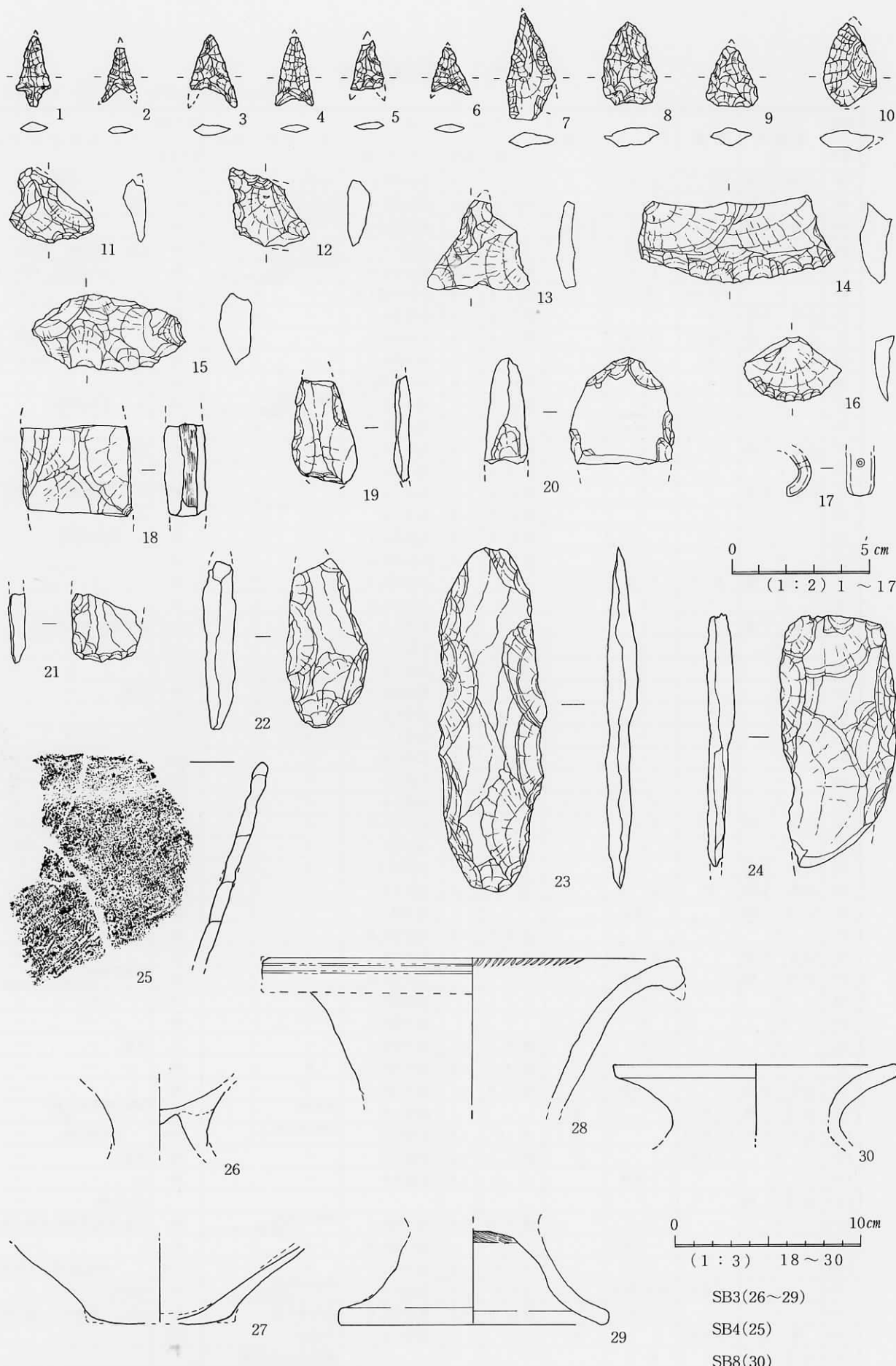


图18 出土遺物実測図 (1)

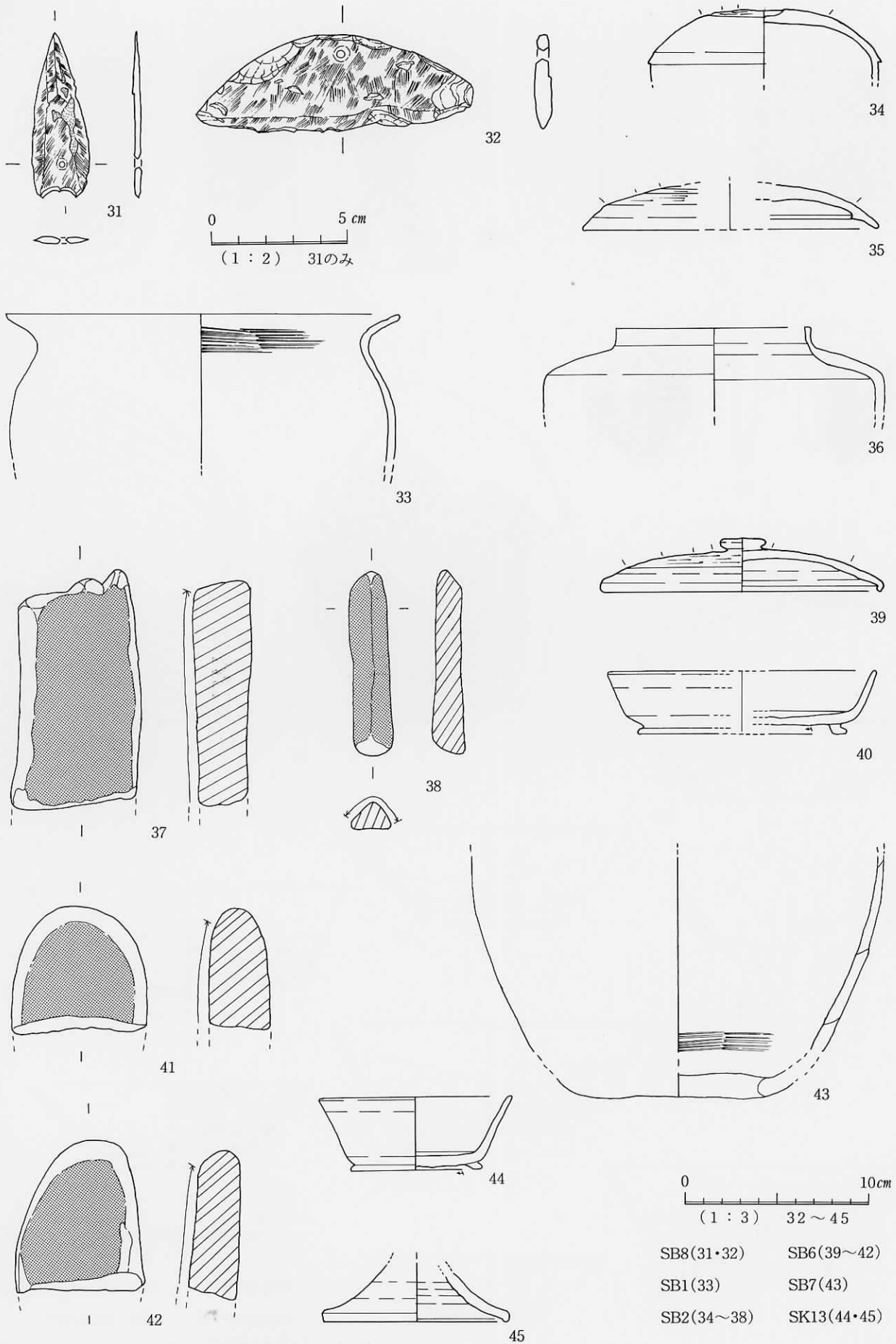


図19 出土遺物実測図 (2)

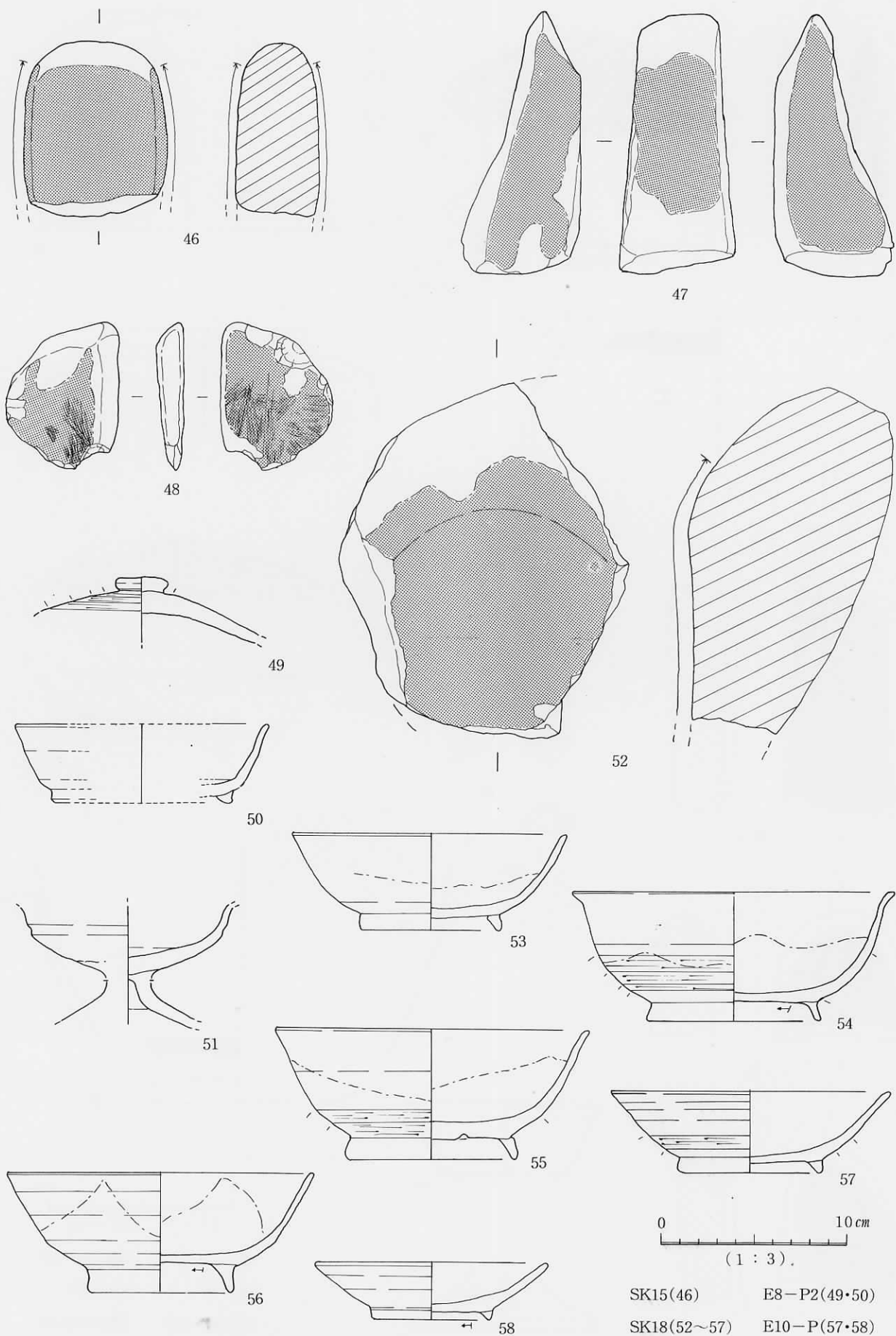


图20 出土遺物実測図(3)

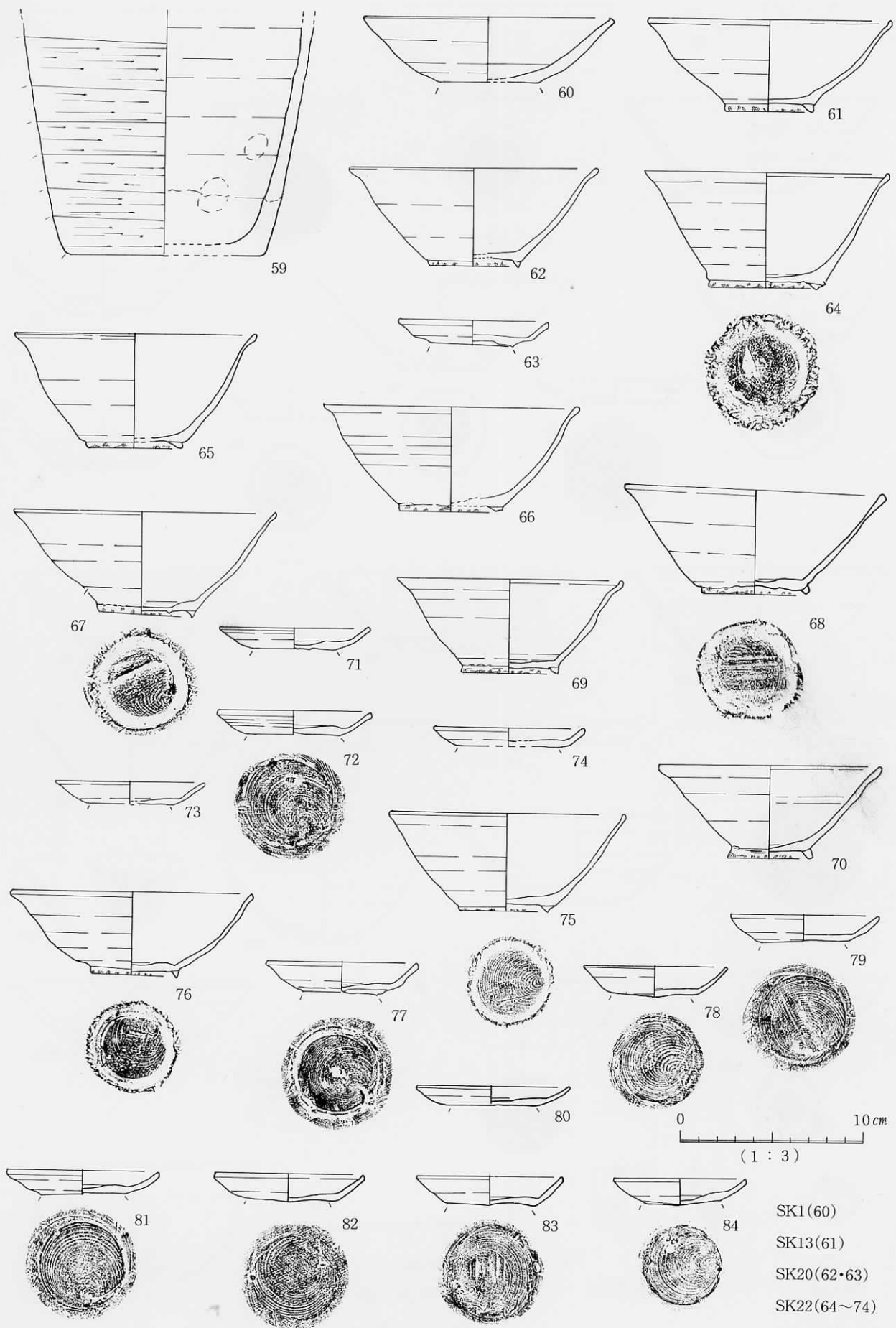


図21 出土遺物実測図 (4)

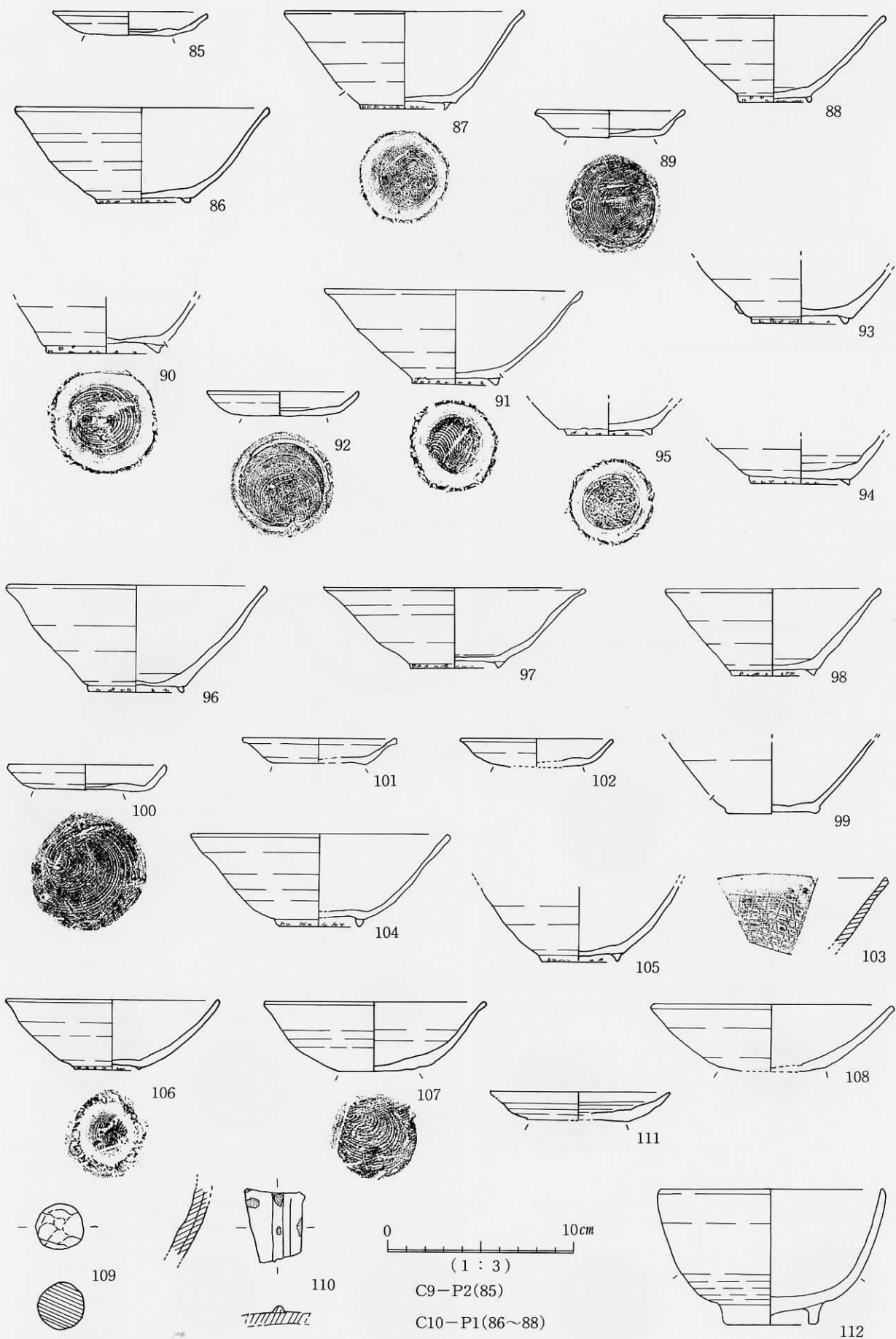


图22 出土遺物実測図 (5)

Ⅳ．二野東段横穴墓

本横穴墓は、可児市二野地内で改良、建設される都市計画道路工事に伴い調査したもので、市土木課からの依頼を受け市教委が調査主体となった。法手続は下記のとおりであり、調査担当は社会教育課の長瀬治義と上井有理である。調査実施日は、平成11年1月29日の雪降る中であった。

・文化財保護法第57条の6第1頁の手続き

市教委発 平成11年1月26日 教社第330号 (遺跡発見の届出) 県教委宛

県教委発 平成11年1月26日 教文第33号の15 (遺跡発見の通知) 市教委宛

・文化財保護法第98条の2第1頁の手続き

市教委発 平成11年1月29日 教社第331号 (発掘調査の報告) 県教委宛

市教委発 平成11年2月3日 教社第339号 (調査終了の報告) 県教委宛

本横穴墓をとりまく環境や立地条件については、Ⅱ章で述べたので略す(図2)。本横穴墓は、長年の風雨により半壊状態であり、無論開口し、玄室内での堆積土の除去作業も清掃程度で必要なかった。

確認された遺構 (図23)

玄室部分の約半分程度の遺存が確認できたが、天井部分については崩落が著しく、かろうじて奥壁との境のラインを確認する止まった。床面レベルの標高は、約115.2mを測る。

玄室床面の遺存長は、A-A'ラインで2.23m、床面積はB-B'ラインで5.60mを測る。玄室床面の最大幅はB-B'断面の位置より30cm程手前であり、5.70mとなろう。奥壁は直立せず弧を描いて立ち上り、天井部までの高さ1.39mを測る。この部分と、B-B'断面にかろうじて残る天井部のレベルを合わせて考えれば、天井は少なからずドーム状を成すようである。

側壁はB-B'断面では内傾し、C-C'断面ではほぼ直立をみせる。床面はほぼ平坦であるが、北の側壁に近い部分では20cm程レベルアップしている。本横穴墓は、凝灰質砂泥岩の地山(平牧層)に対して穿たれたものであるが、プライマリーな掘削面そのものは剥げ落ちており、工具痕等の確認は出来なかった。尚、床面清掃の過程においても遺物の出土はなかった。

玄室主軸の方位(磁北)はN-98°-Wを示し、ほぼ東向きに開口する。

床面における幅と側壁の描くカーブは、玄室の平面形態が横長であるような感を示唆する。羽崎古墳群の横穴墓において形態分類された1~7類の中では、玄室の平面が楕円形を成し、天井がドームを描く7類に属するものと考えている。しかし、羨道や玄門部の形態が不明なだけに、推定の域を出ない。

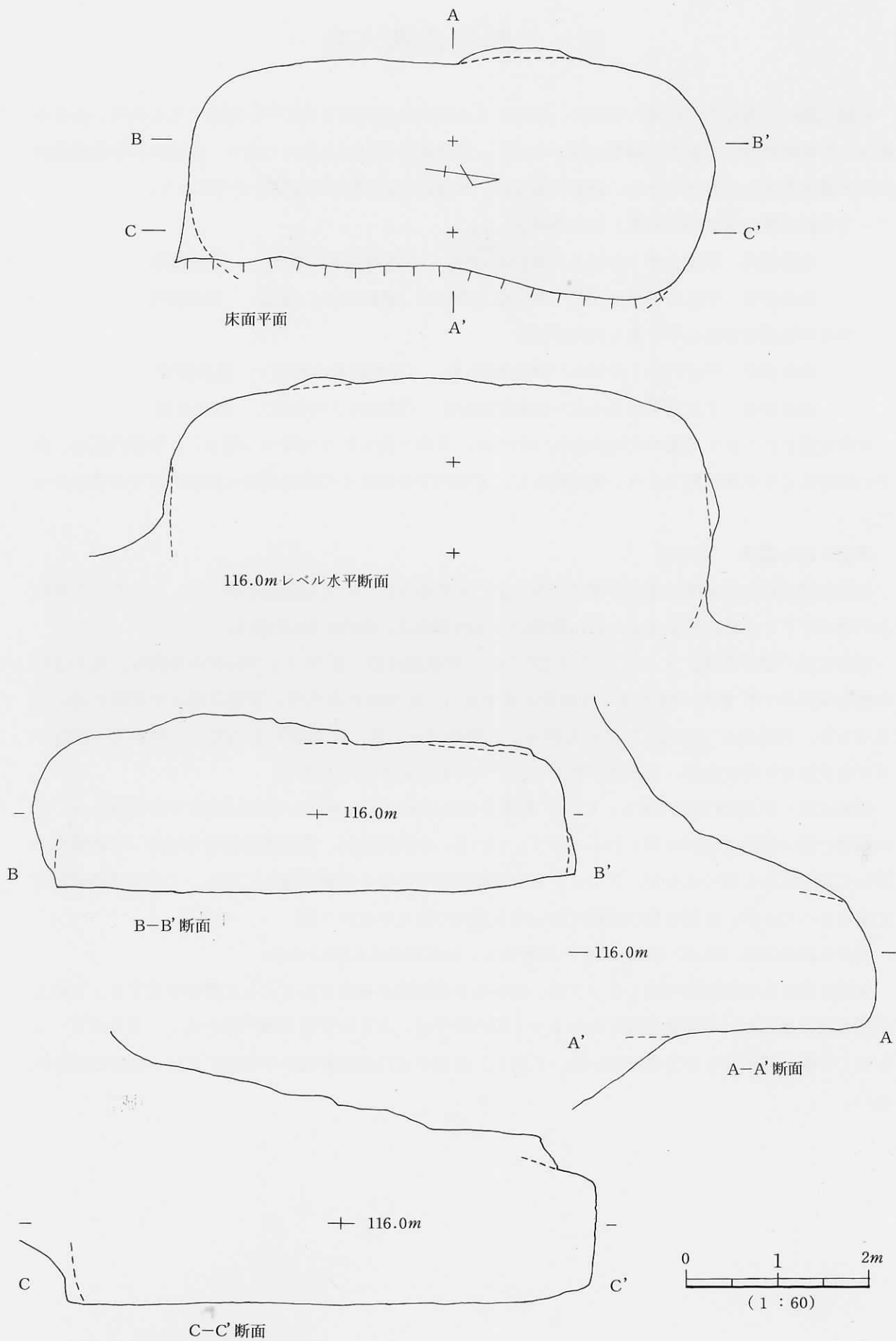


図23 二野東段横穴墓

V. ま と め

(1) 二野東段遺跡の集落について

検出できた竪穴住居址は、縄文時代2軒、弥生時代2軒、古墳時代後期～奈良時代7軒であり、掘立柱建物址は、奈良時代2棟、鎌倉時代2棟と推定している。竪穴住居址はいずれも方形プランを呈し、判明したものは主柱4本を有する。

縄文晩期に属すると考えたSB4・5は、一辺4-5mのごく通例の規模であり、石組みの炉は確認できなかった。調査区内で広範に出土している剥片や石核からみても、調査区外にも住居址が存在する可能性が高いと思われる。

弥生時代に属するSB3・8は、近接して存在する。SB3は通有の規模、SB8はやや大型の長方形プランを呈する。多治見市の根本遺跡の住居址群にみるように、当該時期の住居址はこの手の形を呈することが多いようだ。

他の住居址は、古墳時代末～奈良時代のものと考えられ、やや大型のSB2を除けば、カマドを西又は北辺に有するなど、規模や施設の面のごく通有のものである。

本遺跡は、調査区の北、西、南へと更に広がりを見せる様相を呈するが、各時代に亘り当地を集落として選地した立地条件は、「陽当たりの良い、眼下久々利川の肥沃な沖積地のある場所」であり、まずは農業経営基盤の充実があったのであろう。各時代の集落構造が、小規模であったのか大規模であったのかは、調査面積からみて明言できないが、遺構が密であることは土地利用の多さを意味し、断続的にはあるにしろ村落の営みが定着していたようだ。奈良時代以降の掘立柱建物址も含めて、ごく普通の農村の営みを想像している。弥生時代後期に銅鐸を保有し、古墳時代後期に石工職人が定着して石棺を作り、横穴墓群を営んだ姿そのものはみえてこなかったが、各時代のそれらの集団は、本遺跡にみるような表面上ごく普通の村落の集まりであったのかも知れない。

(2) 出土遺物について

縄文時代(断定はできないがおそらく晩期)における小型石器の石材利用は、実に89%がチャートを、下呂石は8%に止まった。これを市内徳野遺跡A地点のデータと比較すると、徳野遺跡では74%が下呂石、19%がチャートであり、大きく石材の利用状況を異にしている。また、市内北裏遺跡出土の石鏃8,101個についてその割合をみれば、下呂石77%、チャート16%となっている。

本遺跡出土のチャートは、付近に露頭する土岐砂礫層から得られたものと考えられ、下呂石は木曾川の河原に転石としてあるものを入手したものと考えている。さすれば、この3遺跡の利用石材と、その石材産地(土岐砂礫層露頭地と木曾川)から遺跡までの道のりはどうか。土岐砂礫層露頭地へは、二野東段→徳野A→北裏の順に近い。こ

表5 3遺跡の石材利用状況(小型石器と剥片、石核)

石材 遺跡名	チャート	下呂石	サヌカイト	黒曜石	その他	合計
二野東段	345 (89.1)	32 (8.3)	0	2 (0.5)	8 (2.1)	387 (100)
徳野(A)	517 (19.4)	1,974 (74.0)	69 (2.6)	63 (2.4)	44 (1.6)	2,667 (100)
北裏	1,315 (16.2)	6,263 (77.3)	478 (5.9)	45 (0.6)	0	8,101 (100)

※ 北裏は1～3地点の石鏃のみ

個(%)

の傾向は、89%→19%→16%という割合そのものに反映している。露頭地までは直線距離でおよそ、200m以内→南へ1.3km程度→南東へ2.5km程度である。

また、その逆に下呂石が入手可能な木曾川までの道のりはどうか。これは無論のこと、木曾川の低位段丘面に立地する北裏→中位段丘面に立地する徳野A→二野東段の順となり、その傾向はそのまま77%→74%→8%という下呂石の利用割合に反映する。木曾川までは直線距離でおよそ、200m以内→北西へ1.5km程度→北北西へ4.0km程度である。

近距離移動における人間の価値判断の一端を垣間みるようで、サヌカイトや黒曜石の入手方法（交易など）とは違った側面を示すものと考えている。

弥生時代の遺物では石包丁と有孔磨製石鏃が目にとまる。石包丁は、市内では欠ノ上遺跡、宮之脇遺跡名鉄地点、北裏遺跡、徳野遺跡などで出土しているが、いずれも2つの孔を有する。本例は1つの孔のみを有し、掌指への装着方法を異にしていたものと思われる。有孔磨製石鏃は、身が薄く鋭い。パキッと折れそうな感もあるが、実用品か否か。市内での出土は初見である。

丘陵上に立地する本遺跡からの石包丁の出土は、眼下の沖積地における弥生時代の水田経営を物語るものである。

鎌倉～室町時代にかけての地元産山茶碗類の出土は、地元への製品供給状況を知る上で重要である。筆者は、同時期の窯跡を2ヶ所調査しているが、膨大な量の灰原出土品にはいつも手を焼いている。本遺跡では、土塚や柱穴等に伴う山茶碗類が多くみつかったが、消費地から出土する遺物のいかに貴重で、取り上げ後の扱いも違うことか。感情面だけでなく、消費地出土の同品はかように評価されるべきであろう。

時期的には、山茶碗編年の後半代（白土原1号窯期以降）のものがほとんどで、多くは明和1号窯期に属する。鎌倉時代の後半に本遺跡における一つのピークが考えられる。

（3）二野東段横穴墓について

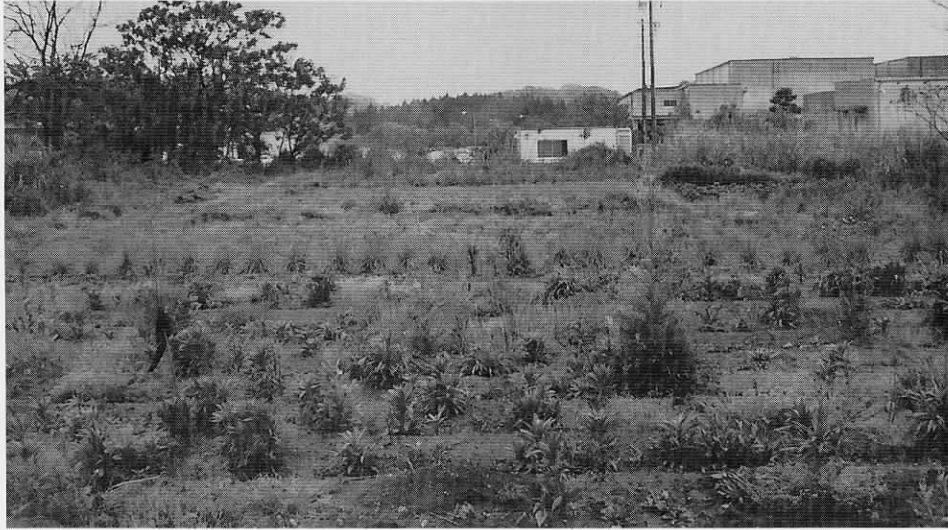
本横穴墓は、久々利川水系における横穴墓群の中で、二野鍋煎横穴墓群のB支群と同じ谷の東斜面に選地するが、その立地はひとつポツンと離れてあり、B支群に含めてよいのか一考を要する。同様な例は、久々利横穴墓群の中にも久々利西山横穴墓がポツンと離れてあり、その群の中での要因を考えれば事足りるものと推定した。本例も、二野鍋煎横穴墓群の中の事情として捉え、特に意味を持たせるようなことは差し控えておく。選地以外の材料（出土品や構造、時期など）が比較できるような状況になるまでは。

註

- （1）多治見市教委『根本遺跡Ⅱ』 1994
- （2）可児市教委『徳野遺跡（A地点）』 1998
- （3）北裏遺跡発掘調査団『北裏遺跡』 1973
- （4）可児市教委『久々利西山横穴墓』 1994

図版1

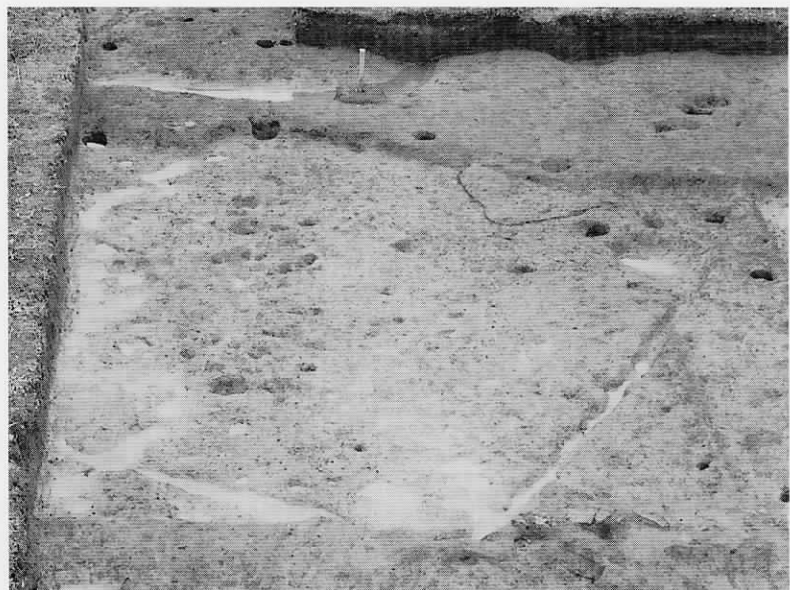
二野東段遺跡 (1)



調査前
(東→西)



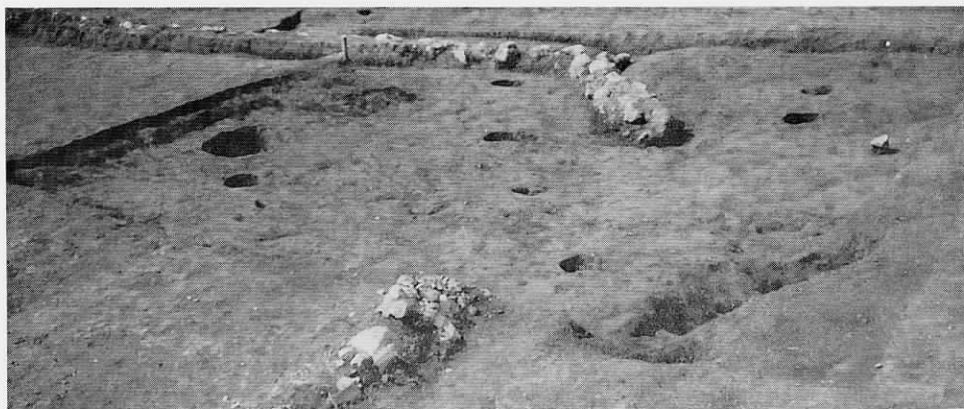
調査前
(北→南)



SB 1

図版2

二野東段遺跡 (2)



SB 2

SB 2 貯蔵ピット



SB 3 弥生土器出土状況 (28)



SB 3

図版3

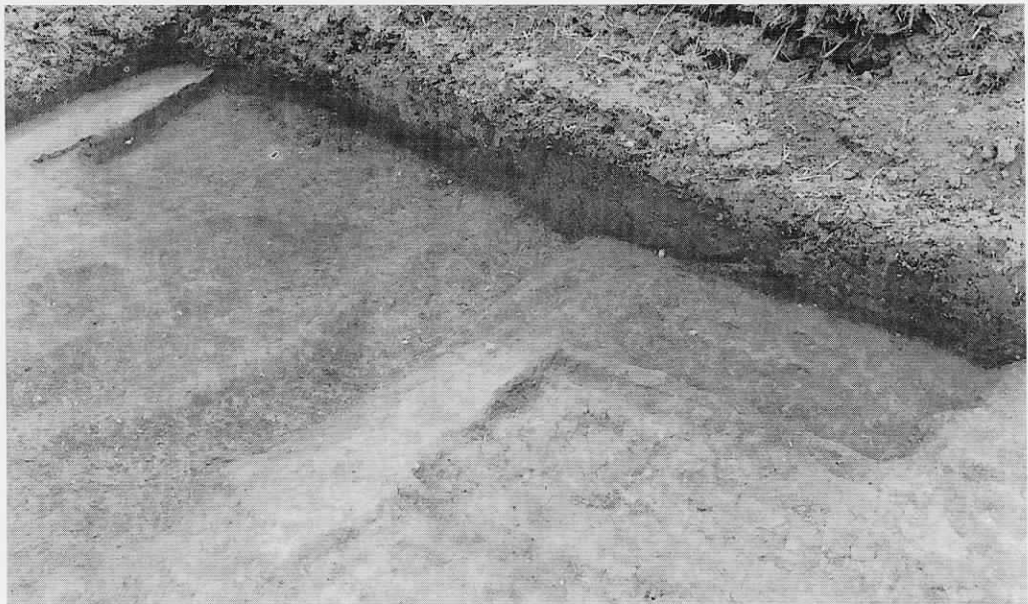
二野東段遺跡 (3)



SB 4



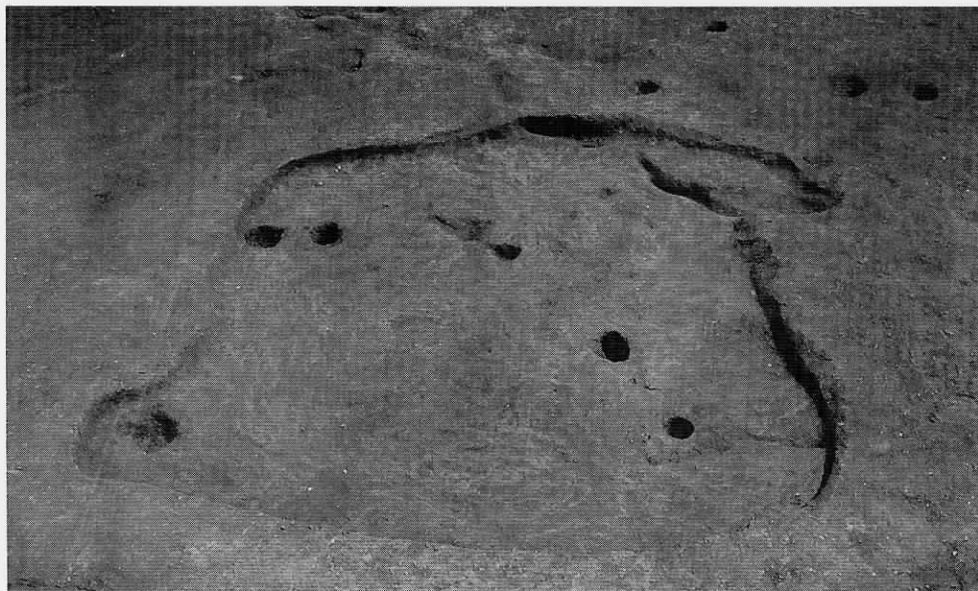
SB 4 とピット群
(A・B-8 グリッド)



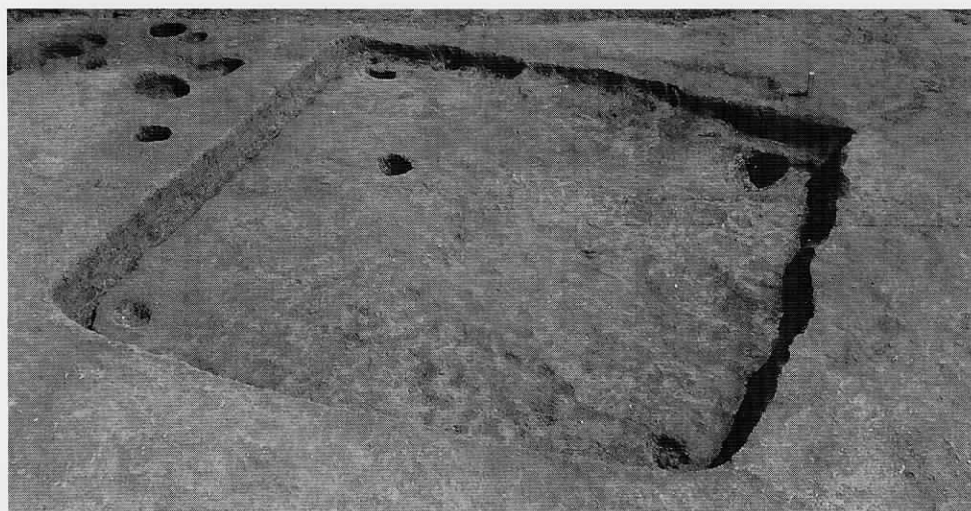
SB 5
SD 7

図版4

二野東段遺跡（4）



SB 6



SB 7

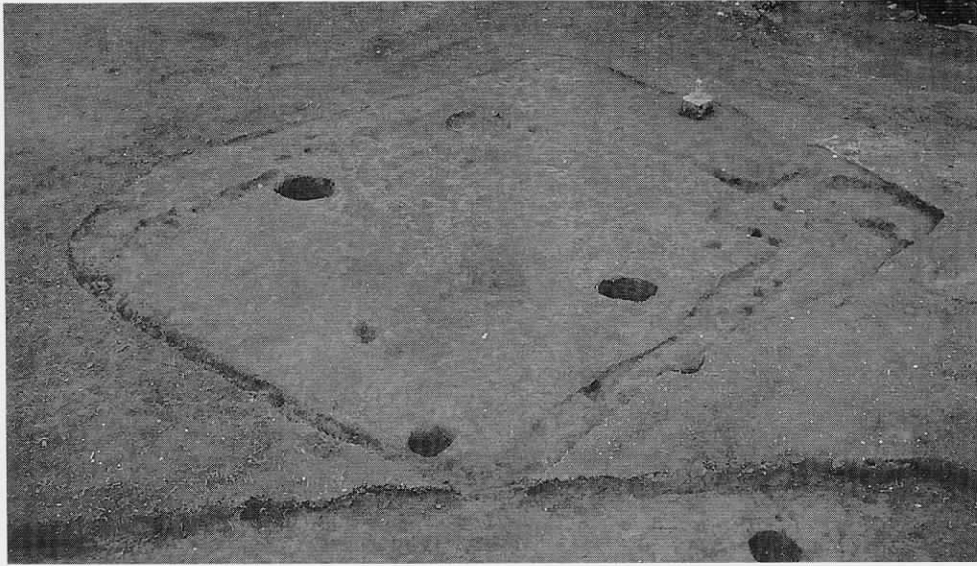


SB 9

SB 8

図版5

二野東段遺跡 (5)



SB9



SB10
SK20



C8-P2



SB11

図版6

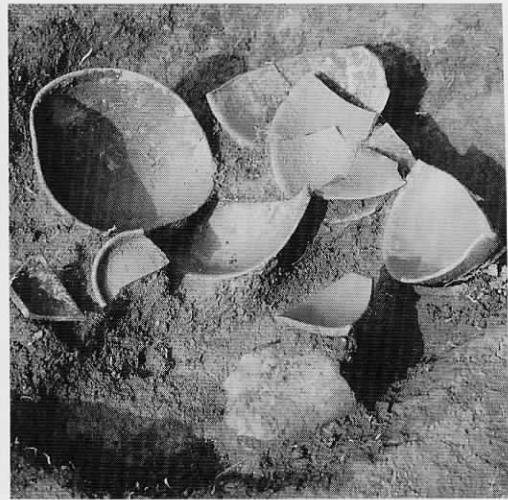
二野東段遺跡 (6)



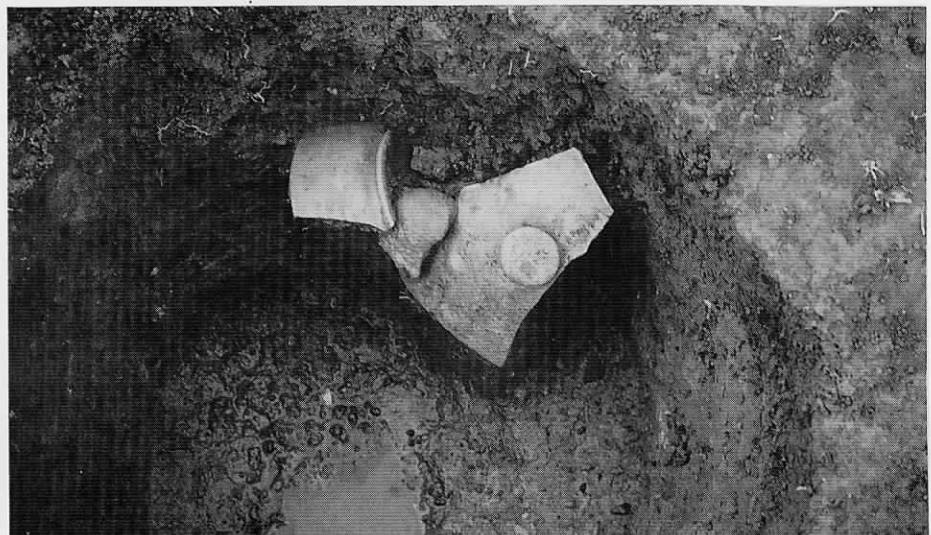
SH1
SD8・9



SH3・4
SK19



SK18



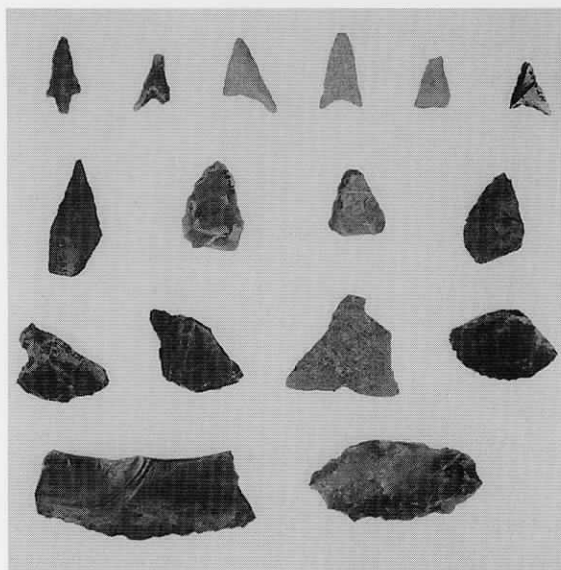
E8-P2

図版7

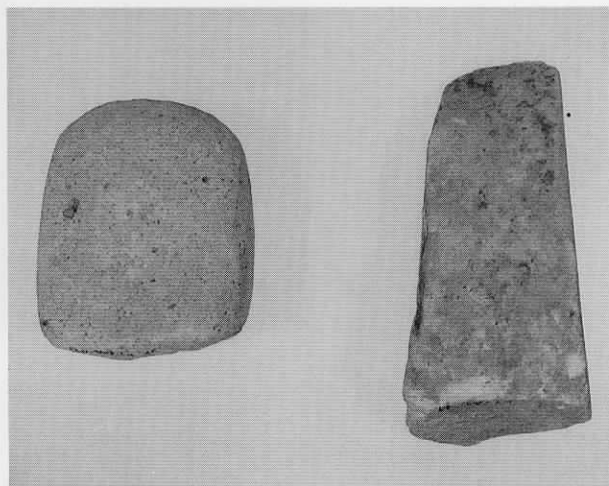
二野東段遺跡（7）



SKと
周辺のピット群

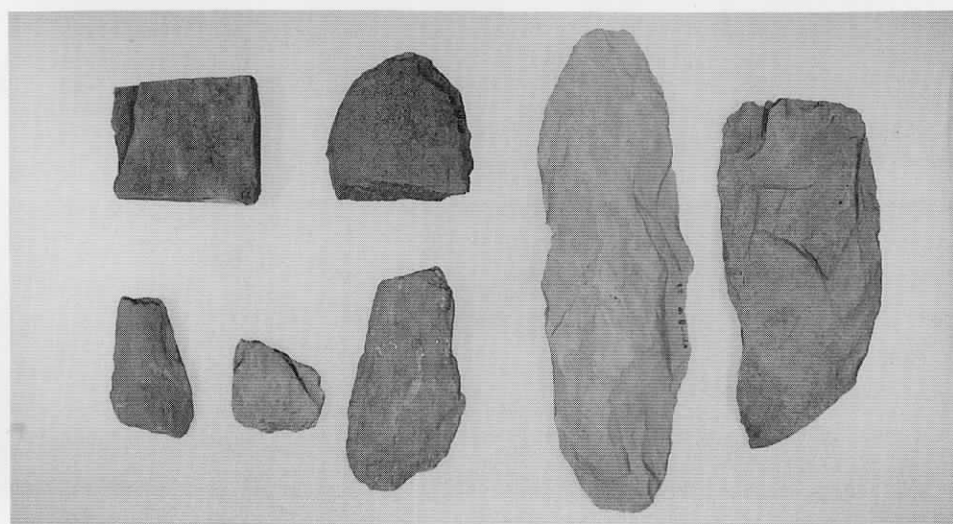


1～16



46

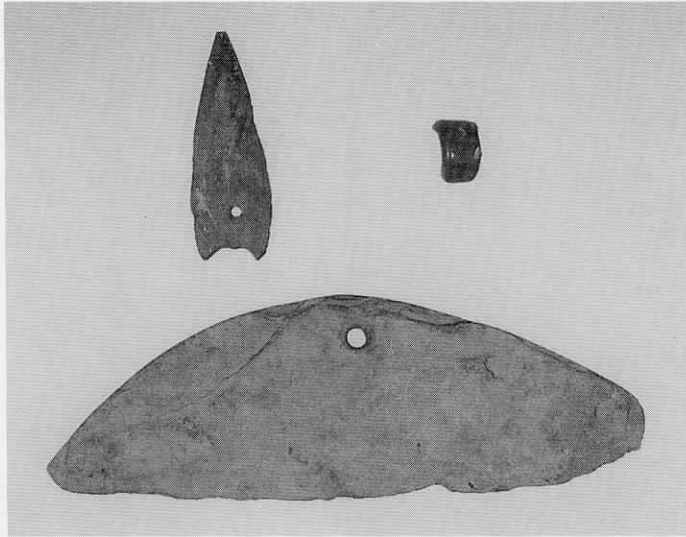
47



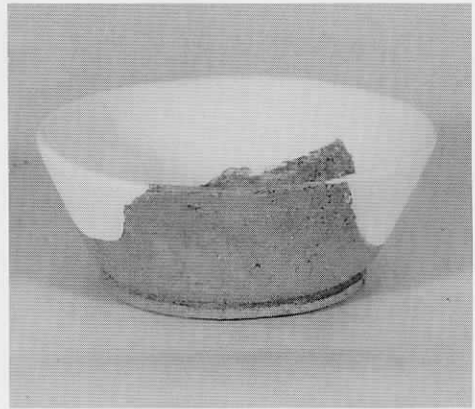
18～24

図版8

二野東段遺跡 (8)



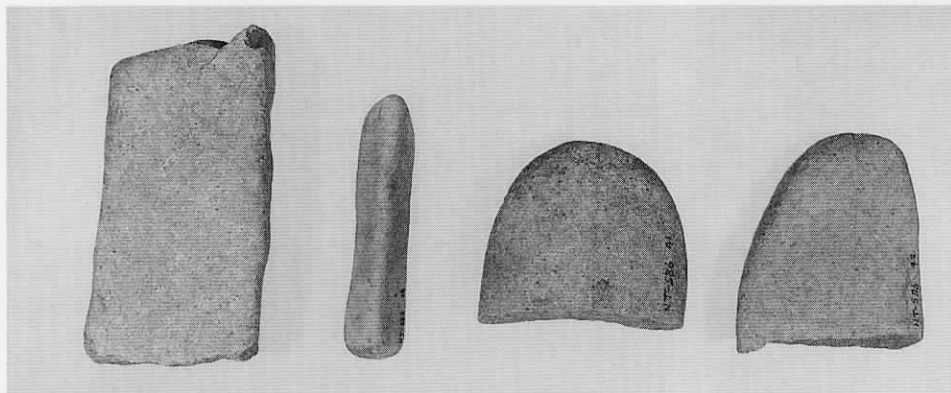
31 17
32



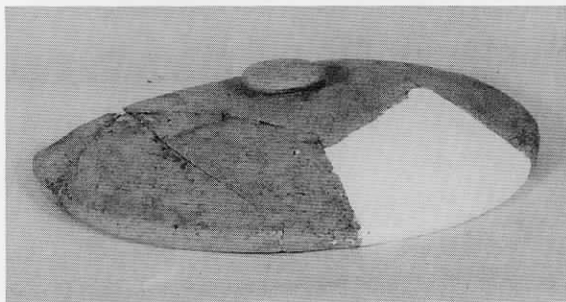
44



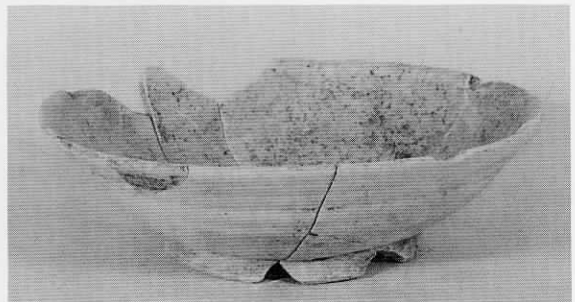
28



37・38・41・42



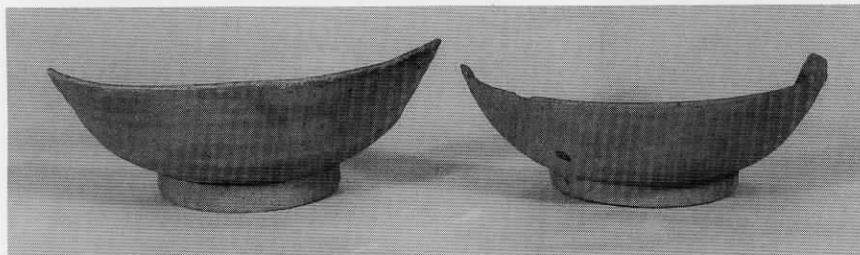
39



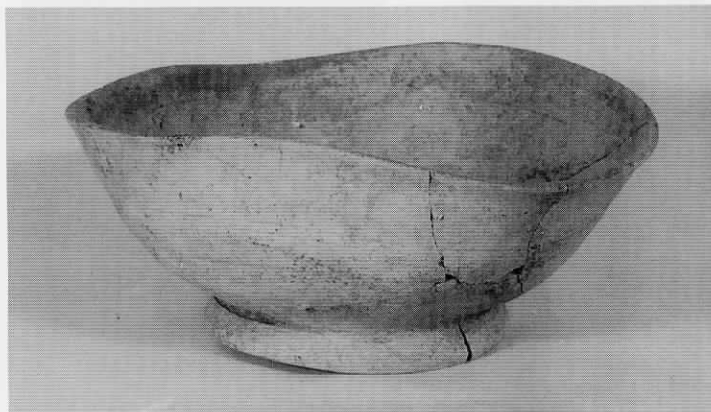
57

図版9

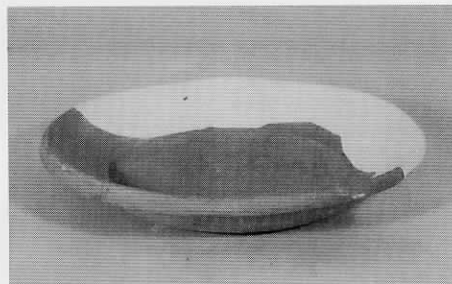
二野東段遺跡（9）



56 53



55



72

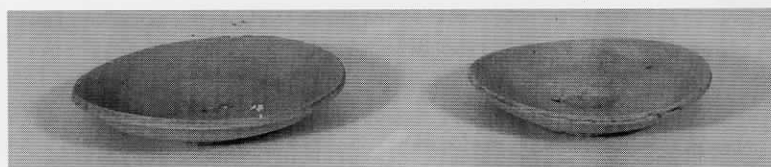
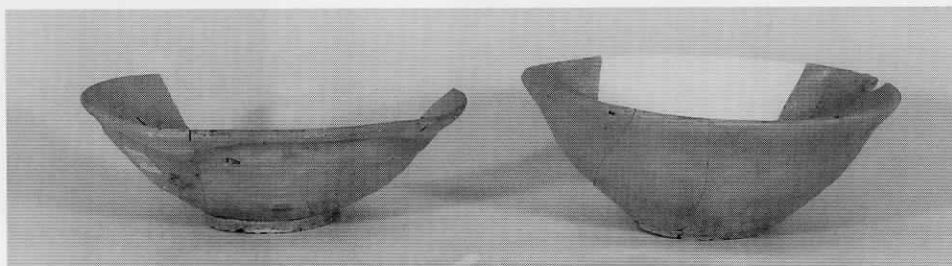


59



68

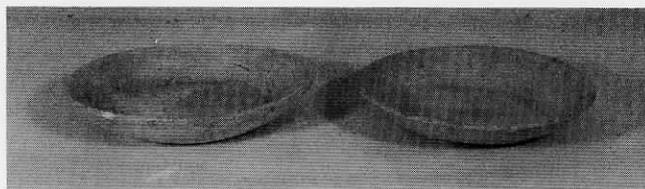
76 75



77 84

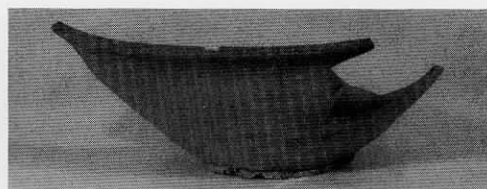
図版10

二野東段遺跡 (10)

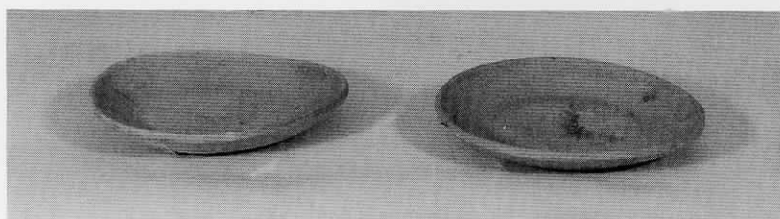


79

78



91

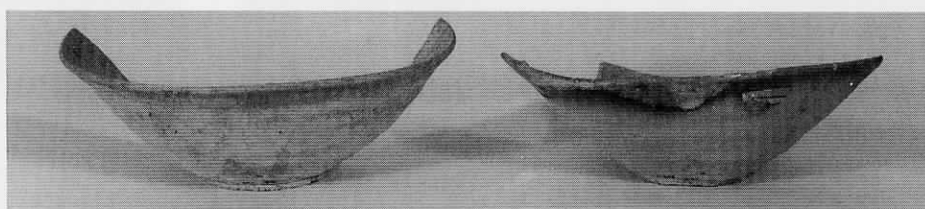


82

81

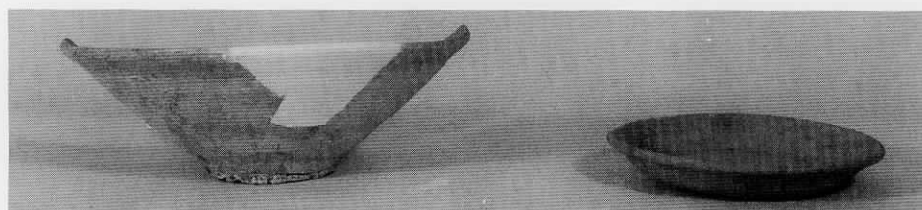


100

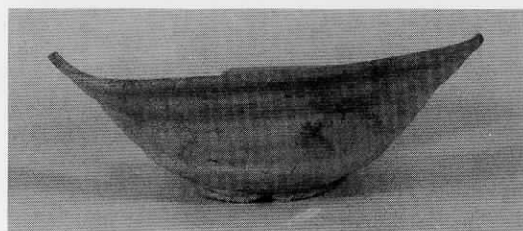


86

87



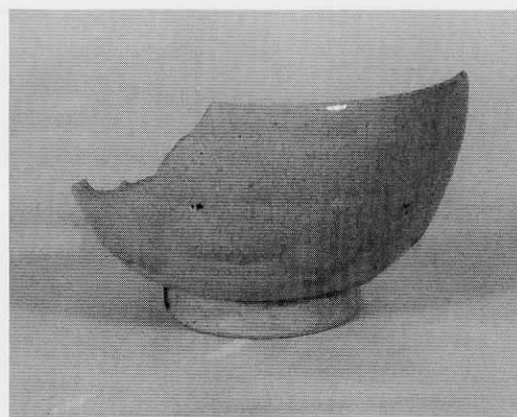
88 89



104



106



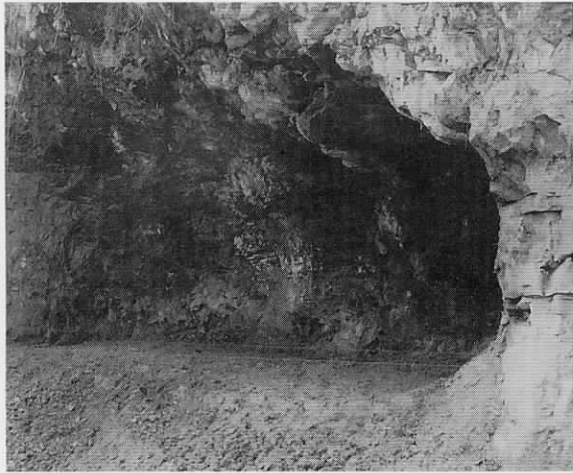
112



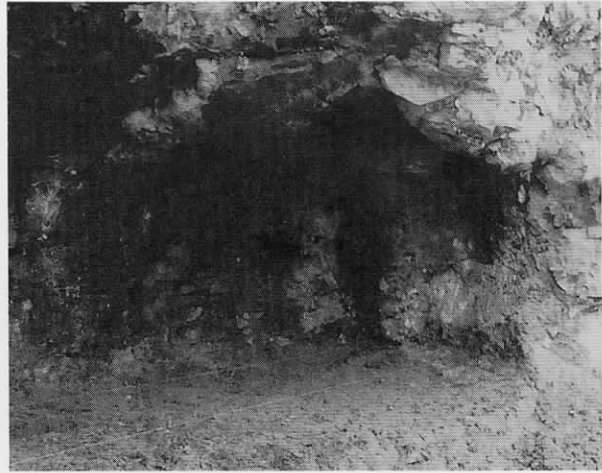
107



横穴墓全景



左側壁部分



右側壁部分



右側壁

『二野東段遺跡・横穴墓』

発 行 平成11年 3月31日

岐阜県可児市広見 1-1

可児市教育委員会

印 刷 可児電子印刷
